

富山県大山町

東黒牧上野遺跡 A地区

発掘調査概要

1990年3月

大山町教育委員会

序

富山平野を一望する大山町東黒牧上野台地に、町民待望の富山国際大学の建設が着工され、建設機械の轟音響く5月より同大学のグランドとなる敷地内の発掘調査を実施いたしました。

本調査に先駆け、昭和62年と63年の2年にわたって行われた東黒牧上野遺跡と東福沢遺跡の試掘調査結果によると、東黒牧上野遺跡は、旧石器時代、縄文時代、平安時代の複合遺跡でおよそ2万年前から1000年前までの人々の生活のあとが残されていることが明らかになりました。

本調査の進捗に伴い、県内では最も密度の高い縄文時代中期の住居跡29棟以上が明らかになりました。

調査の成果に基づき遺跡の保護措置を検討した結果、グランド敷地の形状を変更することで、良好な包蔵地の現状保存をはかることが出来ました。

最後に、今回の調査にあたりご指導いただきました富山県教育委員会及び富山県埋蔵文化財センターの関係各位に感謝の意を表し巻頭のことばといたします。

平成2年3月

大山町教育委員会
教育長 土肥菊壽

例　　言

1. 本書は、大山学園都市建設に先立ち実施した、富山県上新川郡大山町東黒牧上野遺跡A地区の発掘調査の概要である。

調査期間、発掘面積は以下の通りである。

調査期間：平成元年5月16日から同年9月5日　　発掘調査面積 約3500m²

2. 調査は大山町教育委員会が行い、調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を得た。

3. 調査事務局は大山町教育委員会に置き、社会教育係長山本一司が調査事務を担当し、課長笠岡敏男が総括した。また調査期間中は、富山県埋蔵文化財センターの指導・助言を得た。

4. 調査参加者は次のとおりである。

富山県埋蔵文化財センター主任斎藤 隆・同文化財保護主事岡本淳一郎（以上調査担当者）富山県埋蔵文化財センター主任橋本 正・山本正敏・狩野 瞳・神保孝造・久々忠義・同文化財保護主事河西健二（以上調査員）

5. 発掘区の測量にあたっては、町振興課森井正秀・浅野寅和・吉田浩辰の協力を得た。

6. 遺物整理等には、富山県埋蔵文化財センター主任狩野 瞳・神保孝造・同文化財保護主事河西健二の各氏に協力を得た。また、本書の作成、資料整理には、麻柄一志・四柳小夜美・杉崎容子・山口チズ子・坪田和子・土田ユキ子・土田節子・酒井由美子の各氏から種々の御援助をいただいた。記して深甚なる謝意を表したい。

7. 本書は写真及び図版を中心とした概報であり十分な記述は行なっていない。

8. 本書の編集・執筆は、富山県埋蔵文化財センターの助言・協力を得て、斎藤・岡本が分担して行い、個々の責は文章末に記した。尚、土偶の項は、神保孝造氏より寄稿していただいた。

目　　次

| | | | |
|--------------------|----|---------------------|----|
| I 位置と環境 | 1 | 第16図 石組炉実測図 | 19 |
| 第1図 地形と周辺の遺跡 | 1 | 第17図 石組炉実測図 | 20 |
| II 調査に至る経緯 | 2 | 第18図 石組炉実測図 | 21 |
| 第2図 地形と区割図 | 2 | 第19図 炭焼窯実測図 | 22 |
| III 調査の概要 | 3 | 5. 遺物 | 23 |
| 1. 調査の経過 | 3 | A. 土器 | 23 |
| 2. 立地と層序 | 3 | B. 石器 | 23 |
| 3. 遺物の出土状況 | 3 | 第20図 石錐分布図 | 23 |
| 4. 遺構 | 3 | 第21図 石錐の重量度数分布 | 23 |
| 第3図 第1号住居跡実測図 | 5 | 第22図 磨製石斧遺存状態模式図 | 24 |
| 第4図 第2号住居跡実測図 | 7 | 第23図 磨製石斧分布図 | 24 |
| 第5図 第3号住居跡実測図 | 8 | 第24図 打製石斧分布図 | 24 |
| 第6図 第4号住居跡実測図 | 9 | C. 土製品 | 25 |
| 第7図 第5号住居跡実測図 | 10 | 第25図 磨(擦)石分布図 | 27 |
| 第8図 第6号住居跡実測図 | 11 | 第26図 凹石分布図 | 27 |
| 第9図 第7号住居跡実測図 | 12 | 第27図 石皿・敲石分布図 | 27 |
| 第10図 第8・14号住居跡実測図 | 13 | 第28図 繩文時代早期土器地区別分布図 | 27 |
| 第11図 第9号住居跡実測図 | 14 | 第29図 土師器・須恵器地区別分布図 | 27 |
| 第12図 第10号住居跡実測図 | 15 | 第30図 土偶の地区別分布図 | 27 |
| 第13図 第11号住居跡実測図 | 16 | | |
| 第14図 第12・13号住居跡実測図 | 17 | IV まとめ | 28 |
| 第15図 第15号住居跡実測図 | 18 | 引用・参考文献 | 28 |

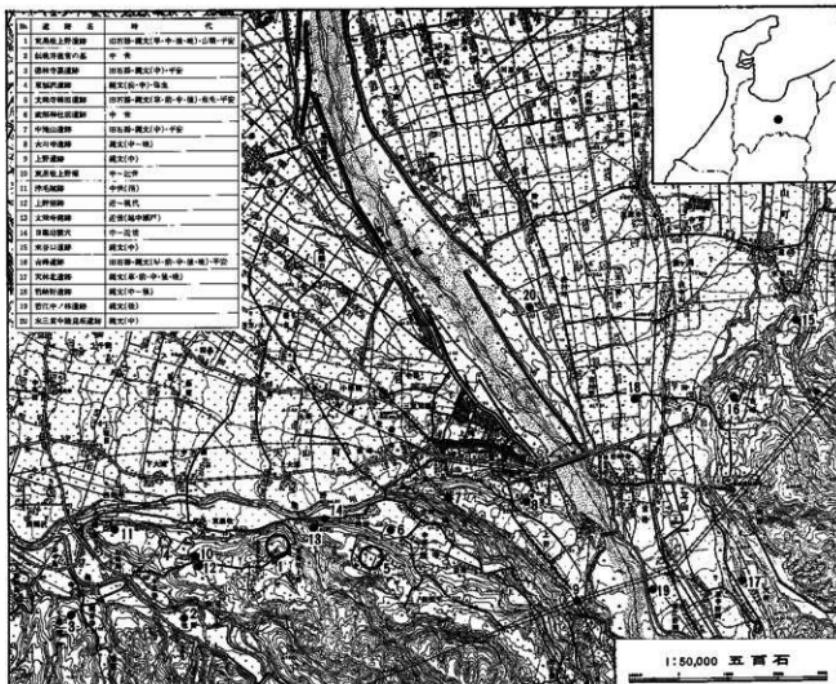
(表紙は第1号住居跡)

I 位置と環境

大山町は、北に富山市、北東は立山町、南は岐阜県に接している。面積は県内最大を占め、大半は山地が多く、地形は東西に長く、南北に短い。立山町との間には、常願寺川が流れ、町の中心部上流を扇状地として形成される。この川の上流には河岸段丘が発達し、高位段丘としての栗原野台地、下位段丘としての上野段丘がある。上野段丘の西側には神通川の支流熊野川が流れ、左岸には文殊寺地区と東黒牧地区がある。

東黒牧上野遺跡は、富山地方鉄道上滝駅の南西約2.5km、東黒牧上野地内に所在する。地形的に東黒牧上野丘陵は東西約2km、南北0.2~0.6kmの東西に細い台地で、標高は140~200m、周囲の比高差40~80mの崖になっている。この付近では東黒牧上野遺跡（旧称黒牧）文殊寺碑田遺跡（旧称碑田）東福沢遺跡などが古くから周知（文殊寺と東黒牧両地区では戦前に瓦製造用の粘土採掘により東黒牧上野遺跡・文殊寺碑田遺跡発見の端緒となる）されていた。

昭和60年からの町史編さん事業による分布調査も進み、当東黒牧地区ではもちろん、周辺にも数多くの遺跡が知られるようになった（久々1986・89）。周辺の遺跡のあり方を見ると、現在知られている縄文時代の遺跡のほとんどが、常願寺川の両岸に発達した河岸段丘の平坦面や緩斜面上に分布が見られ、対岸の立山町の段丘上にも吉峰・天林北・岩崎野遺跡などが知られる。現在、里山地区（東黒牧・文殊寺）一帯は、町勢の振興をはかる学園都市建設事業により大きく変わろうとしている。



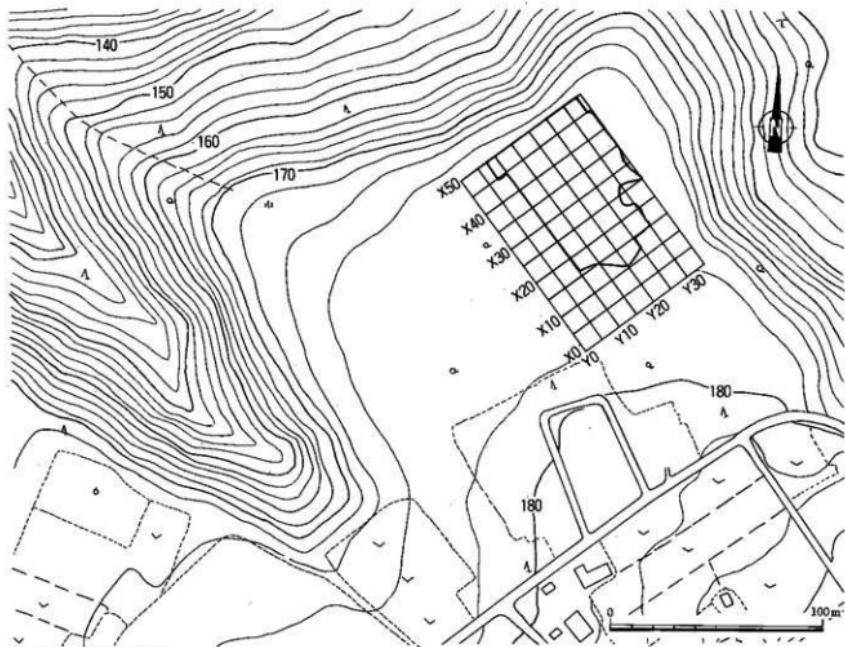
第1図 地形と周辺の遺跡

II 調査に至る経過

遺跡の存在が知られるのは、早川莊作著「越中史前文化」が初出である（早川1936）。これによると、地元民の瓦原料土採集の折約1.3m深さの所に、石を円形に並べ、それの中に焼灰のようなものが発見され、遺物としては、石斧・石棒、縄文（厚手）土器が記載された。以後昭和60年の町史編さん事業の分布調査までは詳細な調査はなかった。この分布調査では東黒牧上野丘陵全体に遺跡のひろがりを持ち、旧石器・奈良・平安時代の遺物も確認、又新たな遺跡の発見もあった（久々1986）。同年町に学園都市特別委員会が設置され、文珠寺、東黒牧の2地区を対象として大学を中心とする学園都市建設を計画した。それより遺跡の保護措置を講ずる為、協議を重ね昭和62年より調査を実施。

昭和62年度調査 第1～3期にわけてA～D・F・G地区の試掘調査を実施し、遺物が多く出土したのは、従来から知られている所である（A地区）。又、縄文時代早期・古墳時代の竪穴住居跡など大山町で新知見のものもあった。調査結果に基づき保護措置を検討した結果、大学建物等の計画変更を行い、一部が現状のまま保存されることになった（久々1989）。

昭和63年度調査 第1～3期にわけてA、B、C北、C南、G、H地区の試掘調査を実施した。グランド予定地では調査の結果、時期を異なる2か所の遺物集中区（縄文時代中期と後期）が確認され、縄文時代後期後葉の遺物は大山町では新知見。調査の結果に基づき保護措置を検討した結果、A地区の2か所遺物集中区のうち、東側の中期の地点は平成元年度に調査、後期の地点は、盛土保存となつた（久々1989）。



第2図 地形と区割図

III 調査の概要

1. 調査の経過

今回の調査は、昭和63年度に実施された、試掘調査の結果をもとに、グランド予定地に係る部分について実施した。発掘調査は、事前に立木の伐採を行い、除去した後、10m間隔に基準杭を設けX軸を南北方向にとり、Y軸を東西にとり、2m×2mを一区画とし、土層観察用のあぜは、東西X38Y11~35、南北X12~50Y20、発掘区のはば中央に十文字状に設置。続いて各区の表土耕土と遺物包含層の調査を行い、次に地山上面での遺構検出作業を行った後、各々の遺構ごとに発掘作業を行った。

2. 立地と層序

東黒牧上野丘陵の東南部に位置し標高176~180mである。東及び北側の斜面は勾配のきつい斜面となっている。発掘区の周辺には、瓦製作用粘土採掘（近・現代の瓦）により所々削除された穴がある。

層序は1層表土（10~30cm）、2層黒褐色土層（10~15cm）、3層茶褐色土層（10~15cm）と堆積して地山層（橙褐色粘土層）になる。発掘区の表土層上面の高低差は東西では約30cm東側が高く、南北では約1.8m南側が高く、北に向かって傾斜している。遺物は1層下部~3層上面にかけて出土している。

3. 遺物の出土状況（第23~30図）

遺物は発掘区のはば全域で出土（但し北側X41~50、Y11~35区は全体的に遺物は少ない）している。遺物の主なるものは縄文時代中期の土器・石器・土製品等が大半を占めている。若干ではあるが、石棺、縄文時代早期・後期の土器・平安時代の土師器・須恵器・管状土錐等が出土。早期の土器は発掘区のはば中央部に多く出土し、土師器・須恵器は全体にまばらに出土している。

（斎藤）

4. 遺構（第3図~19図、図版第2、4~16図）

第1号住居跡（第3図、図版第4）

住居跡は発掘区の西側丘陵頂部や斜面、X25~28、Y11~15区で検出された。5号住居跡の北西に位置する。

平面形は梢円形を呈し、規模は長軸8.2m・短軸6.4mで本遺跡中最大規模の住居跡である。標高は床面で176.8mを測り、地山から約60cm掘り込んでいる。南側の壁が1部分攢乱を受けているが、住居跡の遺存状況は良好である。住居跡の覆土は黒色土が堆積しており、長い間隙として開いていたと考えられる。

柱穴はP1~P12まで12本確認されたが、主柱穴はP1~P10の線対称関係にある10本と思われる。橋本正氏の分類〔橋本1976〕では10本主柱Y形にあたると考えられる。主柱穴は、掘り方が直径30~50cmで床面から40~60cm掘り込まれる。主柱穴間の距離はP1~P6が6.1m、P2~P10が3.0m、P3~P9が5.0m、P4~P8が4.0m、P5~P7が3.5mである。住居跡の主軸はP1とP6と炉跡を通る線と考えられ、N-42°-Eである。主軸を狭んで南北の線対称関係にある柱穴間の距離はP3~P9間が最も長く、東側が広がる配列である。

P5~P6間を除いた全周には幅50cm・高さ10~20cmのテラスが回る。このテラス上には長さ45~75cm・径20~33cmの棒状自然石がすべての主柱穴の横や上に2個を単位として、内側に倒れ込んだ状態で出土した。石の大きさが揃っている点・全ての主柱穴のすぐ外側にある点から考慮して、柱穴と密接な関係と考えられる。県内では直坂遺跡1・4・5・6号住居跡にこの様な2個を単位とした配石がみられ注意されている〔橋本1973〕。石川県金沢市笠舞遺跡第10号住居跡でも同様な柱穴外側の棒状自然石がみられ、柱穴との関係を示唆している〔南・上田1981〕。

炉は長方形の石組炉が住居跡内の中央や南西に1基設けられ、主軸方向はN-65°-Eである。規模は長辺2.0m・短辺0.9mである。炉石は長さ35~50cmの河原石を並べ方形に区画しているが、東側の炉石は残っていない。焼土は炉内の西側に広がるが、厚さは薄い。炉内には炉石と同様の河原石と土器が入っていた。

住居跡内からは土器・石器・土偶・小型土器が出土している。床面北東側を中心に遺物が出土した。土偶は8点も出土しており、本遺跡住居跡中では最も多い。土偶は壁際を中心とした床面や上、または柱穴（P 8・P 9）覆土内から出土していることから住居跡廃絶後に埋もれたのであろう。石器は石錐28点・磨製石斧10点・打製石斧1点・凹石4点・磨石10点・剝片1点が出土している。住居跡の時期は出土土器から中期中葉に位置づけられよう。

1号住居跡は通常の竪穴式住居とは規模の面で懸け離れている。県内には、他にも規模の大きな竪穴式住居跡が多い。規模で長軸8m以上の竪穴式住居を挙げると以下の住居跡が県内にある。

1 朝日町不動堂遺跡第2号住居跡〔小島1974a〕 規模は長軸17m・短軸8mで14本主柱である。内部施設は北壁中央に大型ピット、住居跡主軸線上に石組炉4基、炉の南側に埋甕2基がある。住居跡の時期は中期前葉。

2 庄川町松原遺跡第4号住居跡〔橋本他1975〕 規模は長軸11.2m・短軸7.0mで12本主柱である。内部施設は中央やや北側に大型ピット2基、中央やや南側に地床炉1基がある。住居跡の時期は中期中葉。

3 富山市道分茶屋遺跡第1号住居跡〔古川1984〕 規模は長軸11.0m・短軸6.5mで、8本主柱である。内部施設は東西両端に大型ピット1基ずつ、地床炉9箇所がある。住居跡は台地北側に位置する。住居跡の時期は中期前葉。

4 立山町白岩蔵ノ上遺跡第7号住居跡〔神保地1981〕 規模は長軸8.6m・短軸6mで、10本主柱である。内部施設は南北に地床炉2基、北側に大型ピットがある。住居跡は台地南北側に位置する。住居跡の時期は中期前葉。

5 小杉町水上谷遺跡第6号住居跡〔橋本・神保1974〕 規模は長軸8m・短軸6mで、8本主柱。内部施設は中央に大型ピット、主軸線上に石組炉2基、埋甕1基がある。住居跡は台地西側に位置する。住居跡の時期は中期中葉。

6 朝日町馬場山D遺跡第3号住居跡〔橋本他1987〕 規模は長軸8m・短軸4.5mで、8本主柱である。内部施設は主軸線上に地床炉2基、南壁寄りに大型ピットがある。住居跡は丘陵西側に位置する。住居跡の時期は中期前葉。

以上が県内の長軸8m以上の竪穴住居跡である。所謂長方形大型住居跡は、長さが8~20m、柱穴が3~7対以上、炉跡は複数または規模が大きい等の特徴を持ち、堅果類の加工処理の共働作業場としての機能を果たすと考えられている〔渡辺1980〕。1号住居跡の特徴としては次の点が挙げられる。規模は長軸8.2mで、10本主柱である。住居跡の位置する地点が集落の中心ではなく外心部である。炉は単設で規模が2.0×0.9mと大きい。形態的には1号住居跡は県内の大型住居跡と同様に長方形大型住居に該当する。しかし出土遺物は本遺跡の他の住居跡と同様で、堅果類の加工を示す遺物は頗るではない。また最近の研究では大型住居の定義を見直そうとする諸説〔曾谷1987・小川1985・1989〕がある。そのため現時点では1号住居跡の性格・機能の断定を避けておきたい。

第2号住居跡（第4図、図版第5）

住居跡は発掘区東側、X33~35・Y33~35区で検出された。北に3号住居跡・南東に6号住居跡が位置する。

平面形は隅丸方形で、規模は長軸3.72m・短軸3.32mである。標高は床面で177.0mで、地山から約40cm掘り込む。

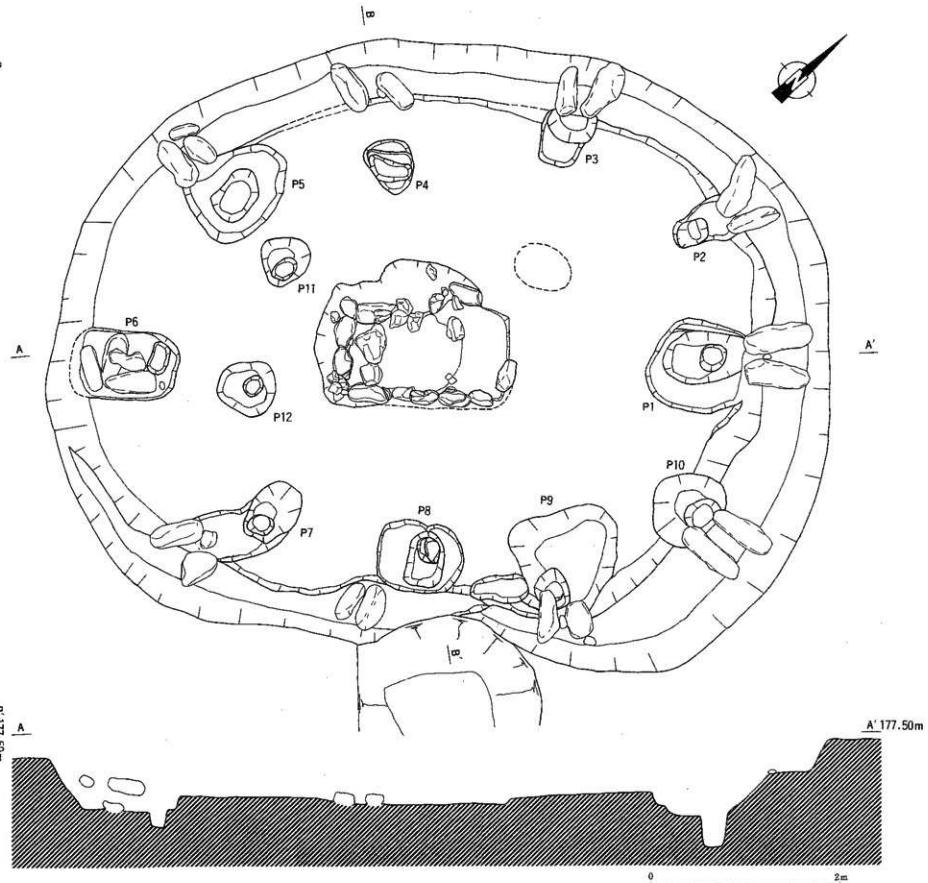
P 1~P 5が主柱穴と思われる。主柱穴は掘り方直径が20~45cmで床面から36~74cm掘り込んでいる。主軸は炉跡とP 5を通る線と考えられ、N-49°-Wである。主軸を挟んだ柱穴間の距離はP 1-P 4間が2.1m、P 2-P 3間が1.7mで、P 1-P 4間が長い。P 5は他の主柱穴と異なり壁に接している。

P 1~P 4に囲まれた柱穴区画内の床面は硬く踏み締まって浅く盛む。

炉は長方形の石組炉1基が住居跡中央やや北西にある。主軸方向はN-49.5°-Wである。規模は長辺1.0m・短辺0.7mで、炉内には北に寄せて土器が埋設されていた。炉石は短辺に長さ40cmの河原石を置き長辺には長さ40cm前後の石と20cm前後の石を組合せている。焼土は炉内全体にあり、炉石は熱を受け亀裂が入っていた。

住居跡内からは土器・石器・小型土器・三角彫形土製品が出土している。石器は石錐4点・磨製石斧4点・打製石斧1点・凹石2点・磨石2点が出土している。また長さ30~50cm・径20cmの棒状自然石が壁際から出土している。

住居跡の時期は出土土器から中期中葉に位置づけられよう。



第3図 第1号住居跡実測図 (1/40)

第3号住居跡（第5図、図版第6）

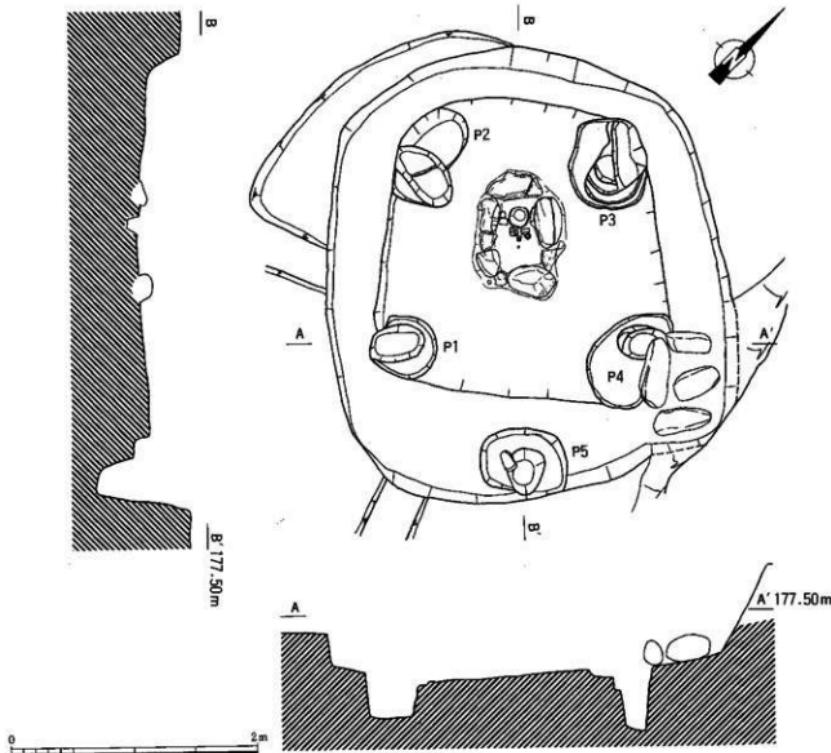
住居跡は発掘区東側でX35~37・Y31~33区に検出された。2号住居跡・4号住居跡の北側に位置する。

平面形は隅丸方形で、規模は長軸3.76m・短軸3.18mである。標高は床面で176.8mで、地山から約50cm掘り込む。

P1~P5が主柱穴と思われる。主柱穴は掘り方直徑20~50cmで、床面から40~70cm掘り込む。主軸はP5と炉跡を通る線と考えられ、N-4°-Eである。主軸を挟んだ柱穴間の距離はP1-P2が1.6m、P3-P4が1.5mではほぼ同じである。P5は他の主柱穴と異なり最も壁に近い。

炉は楕円形の石組炉1基が住居跡の中央や北側にある。炉の主軸方向はN-1°-Wである。規模は長軸0.80m・短軸0.54mである。炉は径20cm程の河原石を楕円形に組んでいる。焼土は全体にあり、炉石は熱を受け龟裂が入る。

覆土中及び床面上を中心に多くの遺物が入っていた。住居跡内からは、土器・石器・土偶・三角墳形土製品・土製耳飾が出土している。石器は石錘13点・磨製石斧8点・打製石斧2点・凹石2点・磨石2点・石皿2点・叩き石1点



第4図 第2号住居跡実測図(1/40)

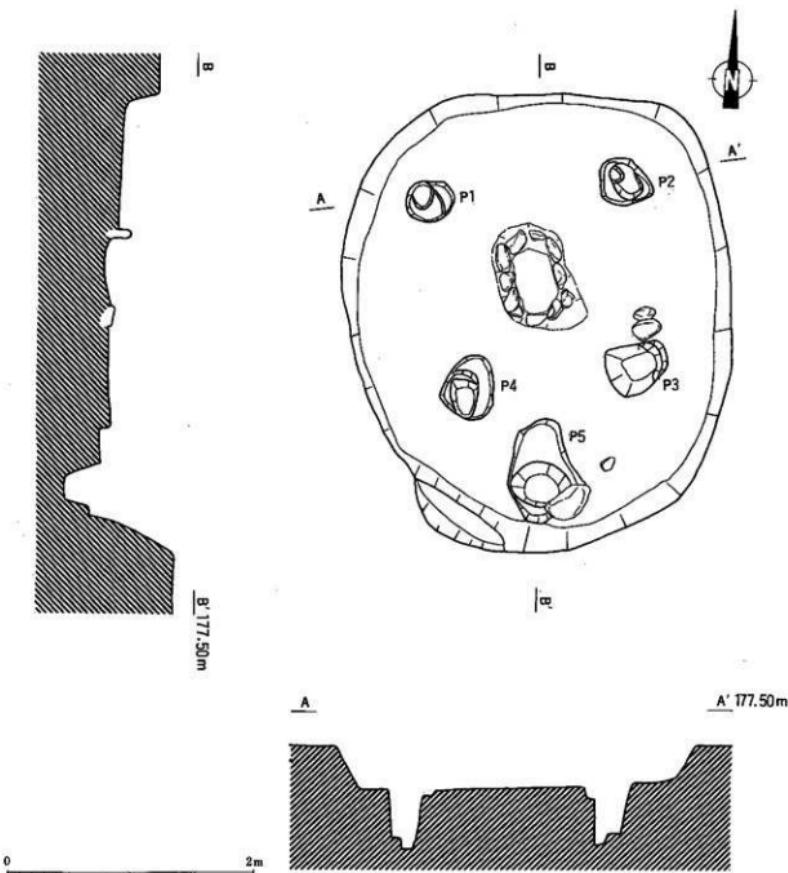
がある。三角墳形土製品はP5覆土内から出土している。

住居跡の時期は出土土器より中期中葉に位置づけられよう。

第4号住居跡（第6図、図版第7）

住居跡は発掘区の東側X34~36・Y28~30区に検出された。11号住居跡と3号住居跡の間に位置する。

平面形は隅丸方形で、規模は長軸3.54m・短軸3.46mである。標高は床面で177.0m、地山から約45cm掘り込む。P1~P4が主柱穴と思われ、掘り方の直径30~50cmで床面から35~60cm掘り込んでいる。P5は位置が主柱穴と考えられるが他より浅い。主軸はP5と炉跡を通る線と考えられ、N-21°-Wである。主軸を挟んだ柱穴間の距離はP1-P2が1.9m、P3-P4が2.0mでほぼ同じである。南北柱穴間のP1-P4間とP2-P3間には深さ10



第5図 第3号住居跡実測図 (1/40)

~20cm・幅20cmの断面U字形の溝が認められる。床はP1~P4の柱穴区画内が浅く盛んでいる。

炉は楕円形の石組炉1基が住居跡の中央やや北にある。主軸方向はN-15°-Wである。長軸0.74m・短軸0.62mの

規模をもち、炉石は20~30cmの河原石を楕円形に組んでいる。焼土は炉内全体に広がっている。

住居跡内からは土器・石器・土偶・小型土器が出土している。石器は石錐17点・磨製石斧9点・磨石3点・剝片3

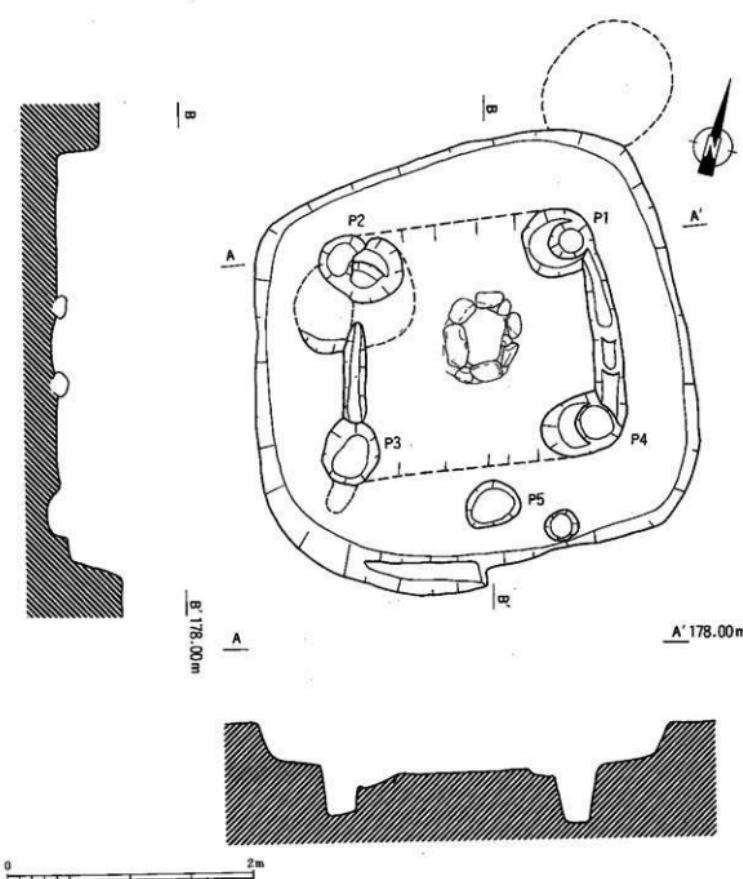
点・叩き石2点がある。長さ30~50cm・径20cmの棒状自然石が壁際の覆土中から出土している。

住居跡の時期は出土土器より中期中葉に位置づけられよう。

第5号住居跡（第7図、図版第8）

住居跡は発掘区の南西、X20~23・Y15~17区に検出された。1号住居跡の南東に位置する。

平面形は隅丸方形で、規模は長軸4.20m・短軸4.06mである。標高は床面で177.2m、地山から約50cm掘り込まれる。

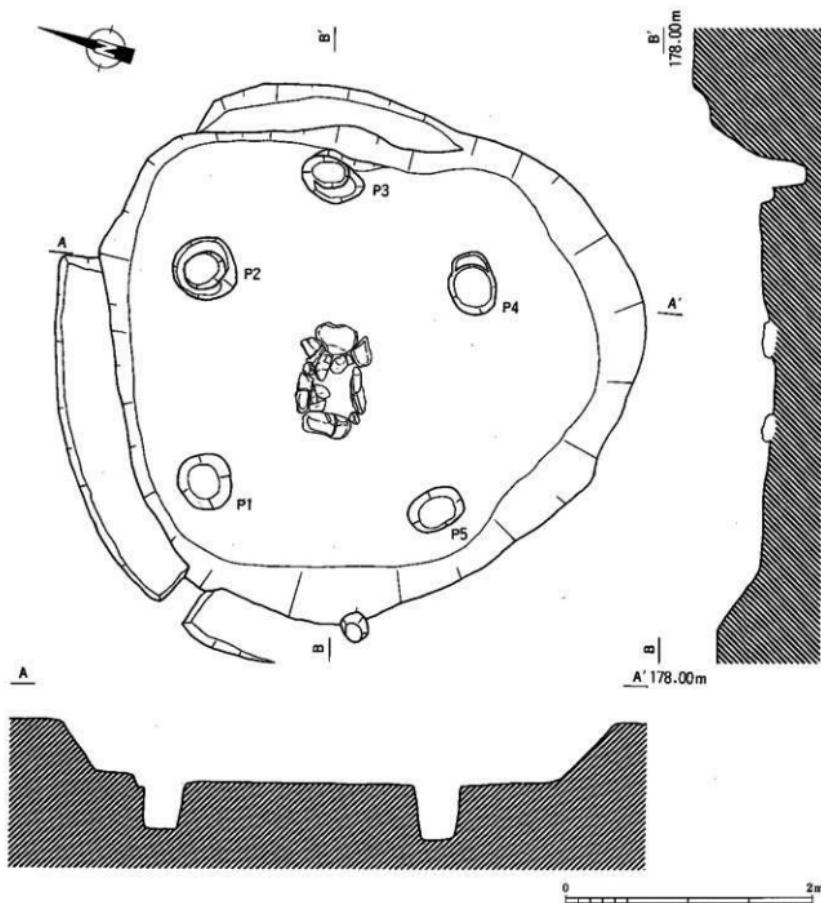


第6図 第4号住居跡実測図 (1/40)

P1～P5が主柱穴と思われ、掘り方の直径25～45cmで床面から40～50cm掘り込まれている。主軸はP3と炉跡を通る線と考えられ、N-80°-Eである。主軸を挟んだ柱穴間の距離はP1-P5が1.9m、P2-P4が2.2mで、P2・P4間がやや広い。P3は他の主柱穴と異なり、壁に接している。

炉は長方形の石組炉1基が住居跡の中央やや西側にある。主軸方向はN-80°-Eである。規模は長辺0.9m・短辺0.5mである。炉石は東辺に長さ約40cmの河原石を、西辺に34×25cmの台状の平たい石を置き、長辺に長さ約40cmと20cm前後の石を並べる。東の炉石に寄せて土器が埋設されていた。また炉内には埋設土器以外にも、土器片が数点出土した。焼土が炉内全体に広がり、炉石は熱を受け亀裂が入る。

住居跡内からは土器・石器・土偶が出土している。石器は石錘16点・磨製石斧10点・凹石3点・磨石3点・メノウ



第7図 第5号住居跡実測図 (1/40)

石1点が出土している。覆土中には長さ40cm・幅20cmの河原石が多く入っていた。

住居跡の時期は出土土器より中期中葉に位置づけられよう。

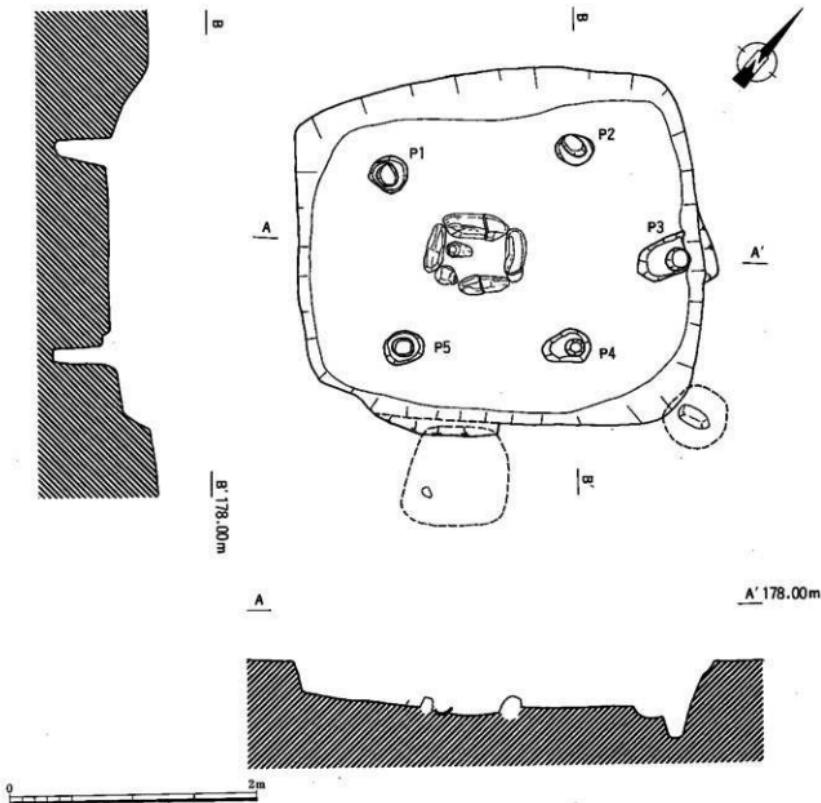
第6号住居跡（第8図、図版第9）

住居跡は発掘区の東側のX29~31・Y32~34区に検出された。12号住居跡の南に位置する。

平面形は隅丸方形で、規模は長軸3.32m・短軸2.88mである。標高は床面で177.0m、地山から約30cm掘り込まれる。

P1~P5が主柱穴と思われる掘り方の直径15~25cmで、床面から約40cm掘り込んでいる。主軸はP3と炉跡を通る線と考えられ、N-54°-Eである。主軸を挟んだ柱穴間の距離はP1-P5が1.5m、P2-P4が1.7mで、P2-P4間がやや広がっている。P3は他の主柱穴と異なり壁に接する。

炉は長方形の石組炉1基が住居跡の中央やや西側にある。主軸方向はN-56.5°-Wである。規模は長辺0.8m・短辺0.6mで、炉内には西に寄せて土器が埋設されていた。炉内には焼土は少ないが、炭化物を多く含む。炉石は短辺に



第6図 第6号住居跡実測図 (1/40)

40cm前後の河原石を置き、北辺には長さ55cmの石を置き、南辺には長さ42cmの長い石と径20cmの丸い石を置く。

住居跡内からは土器・石器が出土している。石器は石錐1点・磨製石斧1点・磨石1点が出土している。

住居跡の時期は出土土器より中期中葉に位置づけられよう。

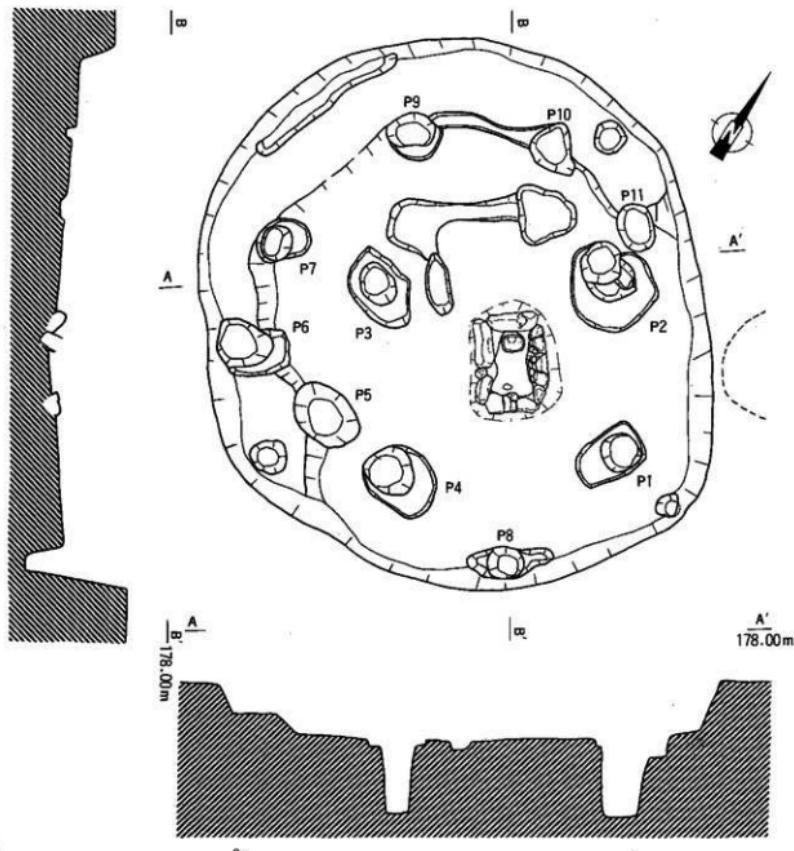
第7号住居跡（第9図、図版第10）

住居跡は発掘区のほぼ中央のX31~33・Y23~25区に検出された。10号住居跡の南に位置する。

平面形は隅丸六角形で、規模は長軸4.54m・短軸4.10mである。標高は床面で177.0m、地山から約60cm掘り込む。

P1・P2・P3・P4・P8が主柱穴と思われる住居跡床面の南東側に偏って配列されている。柱穴の掘り方の直径33~43cmで床面から33~70cm掘り込んでいる。主軸はP8と炉跡を通る線と考えられ、N-32.5°-Wである。

主軸を挟んだ柱穴間の距離はP1-P4が1.9m、P2-P3が1.9mで開きはない。P8は壁に接している。



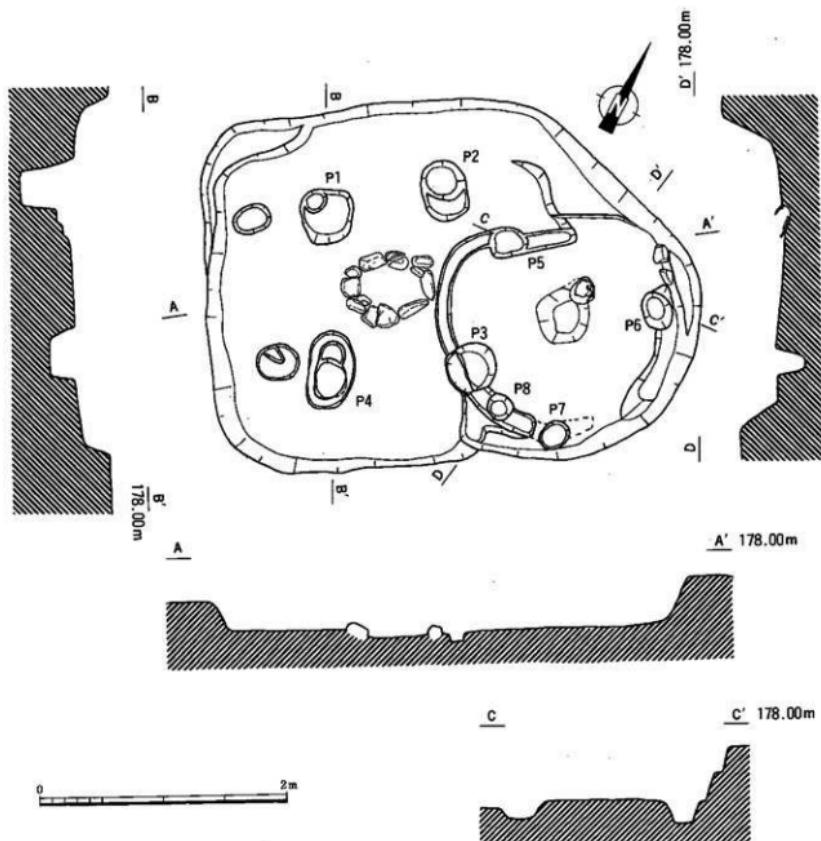
第9図 第7号住居跡実測図 (1/40)

壁際には幅50cm前後・高さ10~20cmのテラスがあり、その斜面に沿って直径25~60cm・深さ20~60cmの柱穴P5・P6・P7・P9・P10・P11がある。これらの柱穴は住居跡の主軸とは方位を異にし、テラスと間仕切り用の柱等なんらかの関係があるものと思われる。

炉は、長方形の石組炉1基が住居跡の南東側にある。主軸方向はN-35.5°-Wである。規模は、長辺0.8m・短辺0.6mである。炉石は短辺に長さ45cm前後の河原石を置き、長辺には長さ40~50cmと20cm前後の河原石を置く。炉は熱を受け亀裂が入る。炉内には北に寄せて土器が斜位に埋設されていた。

住居跡内からは土器・石器・土偶が出土している。石器は石錐9点・磨製石斧8点・磨石1点・剣片1点・石皿1点がある。また長さ30~50cm・径20~30cmの棒状自然石が東側と西側の覆土内から検出された。

住居跡の時期は出土土器より中期中葉に位置づけられよう。



第10図 第8・14号住居跡実測図 (1/40)

第8・第14号住居跡（第10図、図版第11・12）

住居跡は発掘区の南側、X15~16・Y17~18区に検出された。南に9号住居跡が位置する。遺構検出時では1棟と見られたが、2棟の住居跡が重なって検出された。溝で8号住居跡と14号住居跡は区別されると思われる。

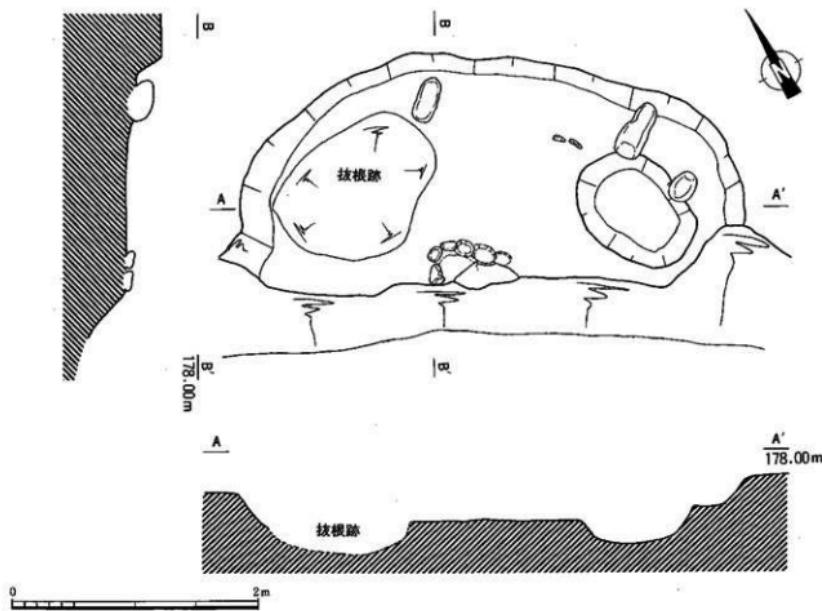
8号住居跡の平面形は隅丸方形で、規模は長軸3.9m・短軸3.0mである。標高は床面で177.4m、地山から約25cm掘り込まれる。P1~P4が主柱穴と思われ、掘り方の直径35cm前後で床面から30~40cm掘り込まれている。柱穴間の距離はP1~P4が1.5m、P2~P3が1.5mである。炉は楕円形の石組炉1基が住居跡の中央にある。炉跡の主軸方向はN-57.5°-Eである。規模は長軸0.76m・短軸0.62mである。炉石は長さ20~30cmの河原石を楕円形に組む。焼土が全体に広がり、炉石は熱を受け亀裂が入る。

14号住居跡の平面形は円形で、規模は径約2.2mである。標高は床面で177.3m、地山から約40cm掘り込まれる。主柱穴と考えられるものはないが、穴が幾つかある。穴は、掘り方の直径20~25cmで床面から8~20cm掘り込まれている。炉は土器埋設炉1基が住居跡の中央やや北側にある。炉跡の主軸方向はN-8.5°-Eである。規模は長軸61cm・短軸45cmである。焼土は埋設土器の南側に直径45cmの広がりを持つ。

両住居跡内からは土器・石器・土偶が出土した。釣手形土器が床面から出土している。石器は石錐5点・磨製石斧3点・凹石1点・磨石2点・石皿2点が出土している。住居跡の時期は出土土器から中期中葉に位置づけられよう。

第8号住居跡（第11図、図版第12）

住居跡は発掘区の南西、X13~15・Y17~18区に検出された。8号住居跡の南側に位置する。



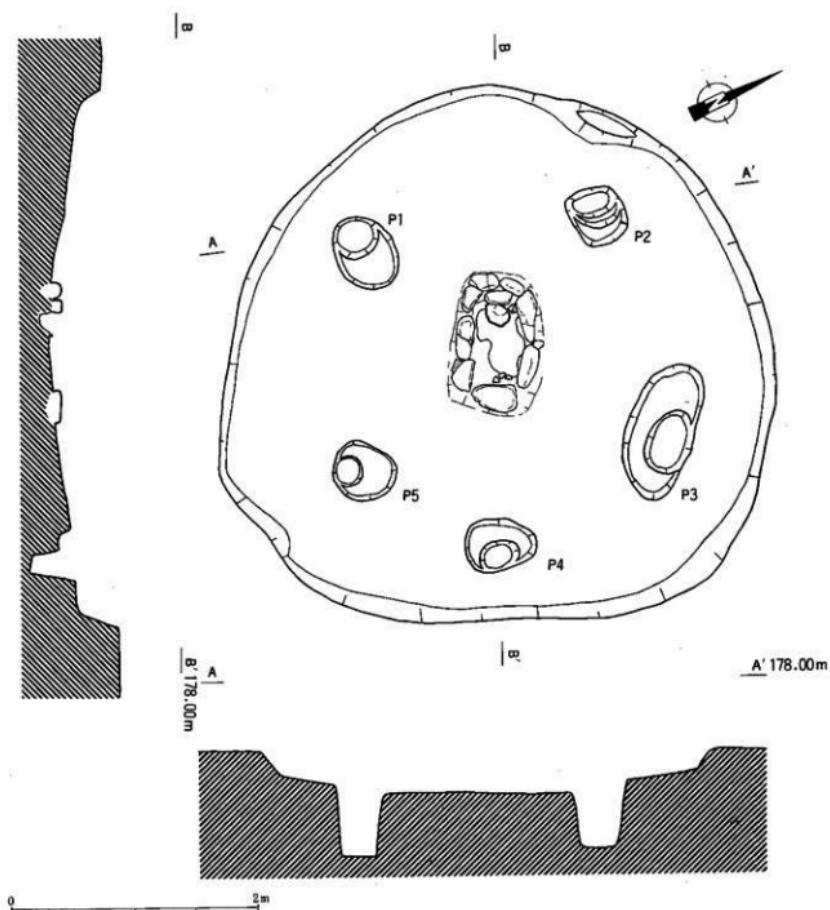
第11図 第8号住居跡実測図 (1/40)

住居跡の半分が削平を受けている。平面図は隅丸方形と考えられる。規模は長軸4.0m以上・短軸2.0m以上である。標高は床面で177.4m、地山から約30cm掘り込まれる。床面には抜根跡等の擾乱を受けているため主柱穴の位置及び本数は不明である。炉の東側には径0.8~1.1mで深さ0.2mの穴がある。

炉は石組炉1基が住居跡の南西にある。半分以上が削平されているが炉石の抜け跡が確認できた。規模は長軸1.3m以上である。炉石は東辺に長さ20~30cmの河原石を組んでいた様である。

住居跡内からは土器・石器が出土している。石器は石錘3点・磨製石斧1点・四石2点・磨石1点が出土した。

住居跡の時期は出土土器から中期中葉に位置づけられよう。



第12図 第10号住居跡実測図 (1/40)

第10号住居跡（第12図、図版第13）

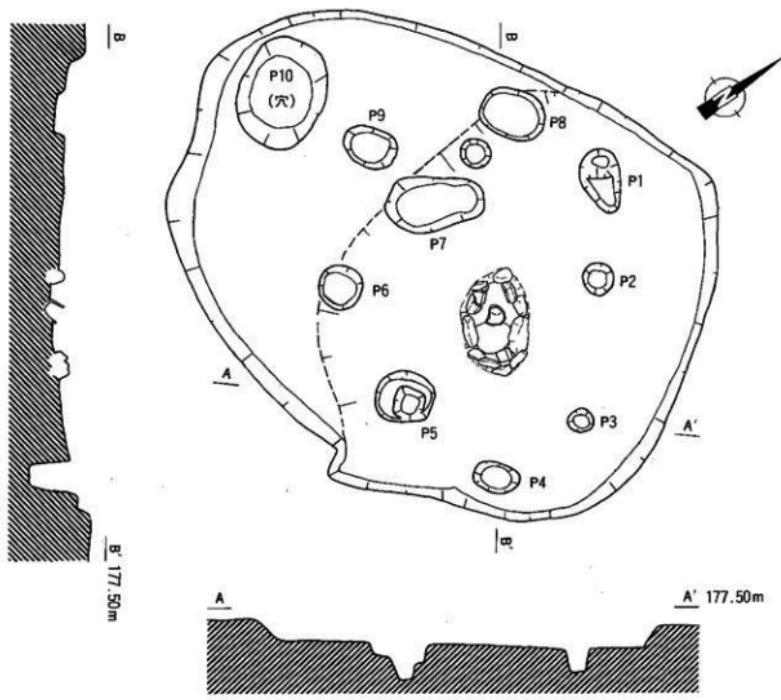
住居跡は発掘区のほぼ中央、X33~35・Y22~24区に検出された。北に11号住居跡、南に7号住居跡が位置する。平面形は円形で、規模は長軸4.4m・短軸4.5mである。標高は床面で177.0m、地山から約40cm掘り込まれる。

P1~P5が主柱穴と思われ、掘り方の直径25~50cmで床面から40~55cm掘り込まれている。主軸はP4と炉跡を通る線と考えられ、N-65°-Wである。主軸を挟んだ柱穴間の距離はP1-P2が2.0m、P3-P5が2.7mでP3-P5間がやや広い。P4はやや壁際に位置している。

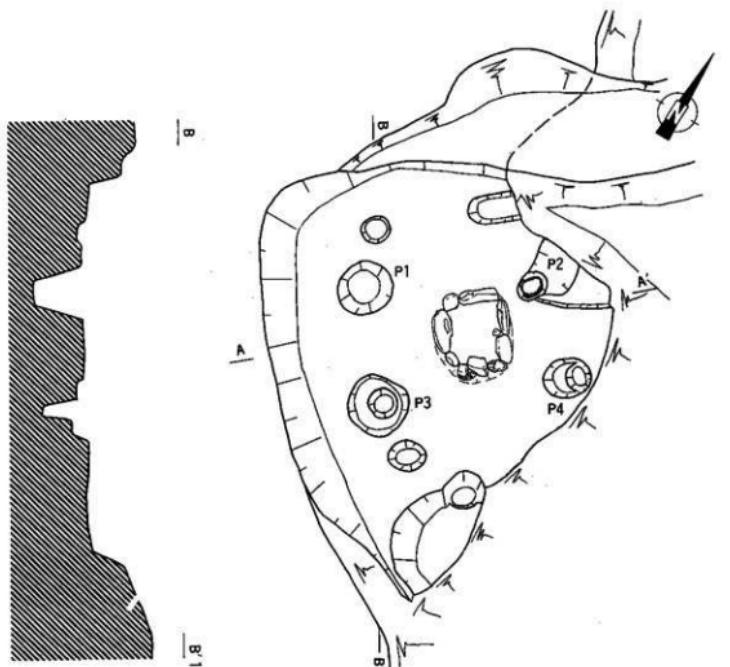
炉は長方形の石組炉1基が住居跡の中央やや西側にある。主軸方向はN-55°-Wである。規模は長辺1.1m・短辺0.7mである。炉石は北・南・西辺に長さ21~43cmの河原石を、東辺に40cm×20cmの台状の平たい石を使用している。西の炉石に寄せて土器が埋設されていた。焼土が埋設土器から東に広がり、炉石は熱を受け亀裂が入る。

住居跡内からは土器・石器・土偶が出土している。石器は石鎌9点・磨製石斧3点・凹石3点・磨石1点・石鏃1点が出土している。覆土中には長さ30~50cm・幅20~30cmの河原石が多く入っていた。

住居跡の時期は出土土器から中期中葉に位置づけられよう。



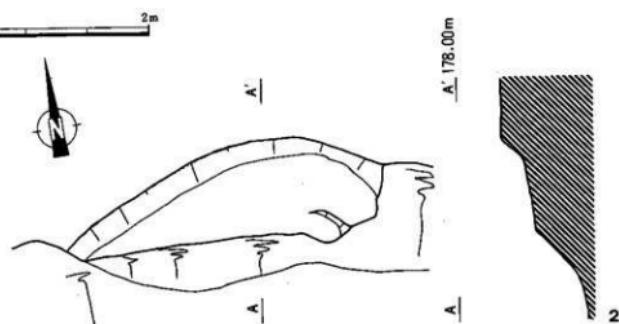
第13図 第11号住居跡実測図 (1/40)



A' 178.00m



1



2

第14図 住居跡実測図 (1/40) 1. 第12号住居跡 2. 第13号住居跡

第11号住居跡（第13図、図版第14）

住居跡は発掘区の南西、X35~37・Y24~26区に検出された。10号住居跡の北、4号住居の西に位置する。時期の異なる穴（P10）が住居跡の西側にあたるため西側の壁の立ち上がりは不明である。P6・P7・P8付近でやや窪むためこの部分から東が11号住居跡の床面になるものと考えられる。

平面形は隅丸方形であったと思われる。規模は長軸3.8m・短軸3.2m程度と推定される。標高は床面で177.1m、地山から約20cm低く上面に削平を受けている。P1・P3・P4・P5・P7が主柱穴と思われ、掘り方の直径20~40cmで床面から12~30cm掘り込まれている。主軸はP4と炉跡を通る線と考えられ、N-54.5°-Wである。主軸を挟んだ柱穴間の距離はP1-P7が1.5m、P3-P5が1.5mで同じである。

炉は楕円形の石組炉1基が住居跡の中央やや南側にある。主軸方向はN-55°-Wである。規模は長軸0.9m・短辺0.5mである。炉石は15~32cmの河原石を楕円形に組んでいる。石組炉中央に土器が斜位に埋設されている。焼土が埋設土器の南側に広がり、炉石は熱を受け亀裂が入っていた。

住居跡内からは土器・石器が出土している。石器は磨製石斧3点・磨石1点・剣片1点が出土している。

住居跡の時期は出土土器から中期中葉に位置づけられよう。

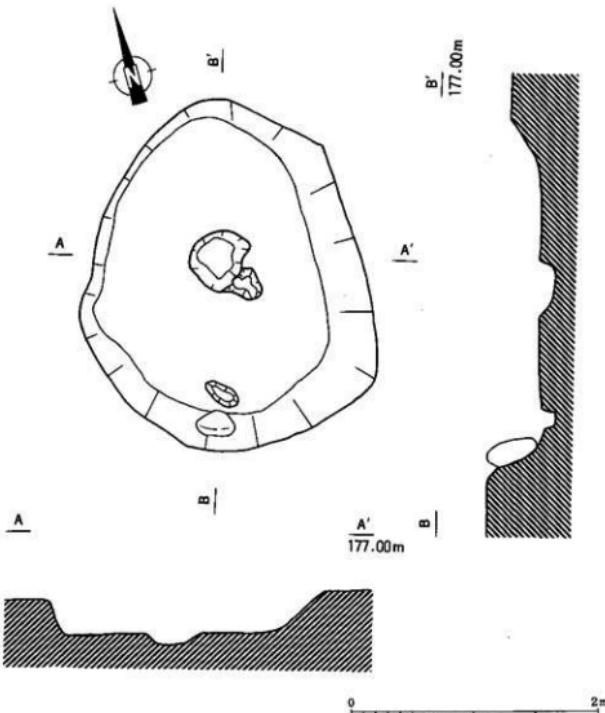
第12号住居跡

（第14図、図版第15）

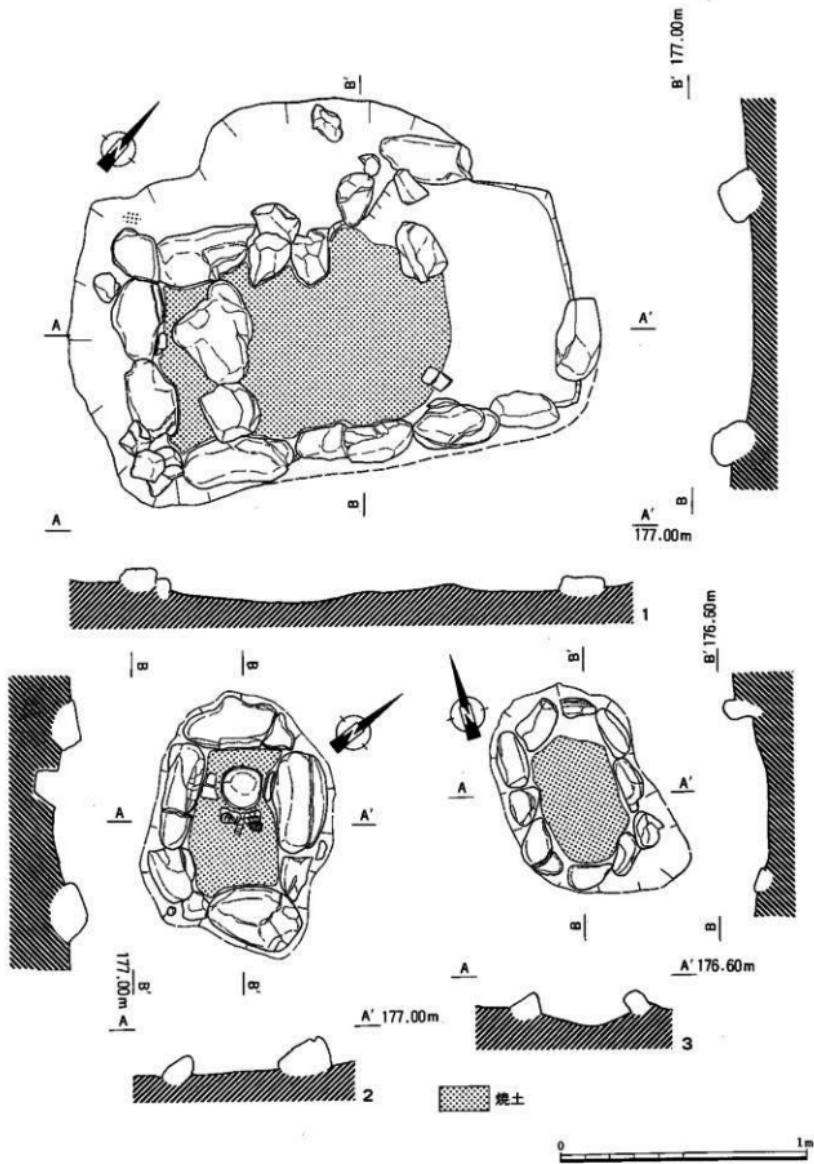
住居跡は発掘区の東、X24~26・Y28~30区に検出された。6号住居跡の南に位置する。

探土により半分以上が削り取られている。平面形は、隅丸方形と推定される。規模は残存部分で長軸3.5m・短軸2.8mである。標高は床面で117.3m、地山から約50cm掘り込まれる。P1~P4が主柱穴と思われるが削平部分にも存在した可能性がある。主柱穴は、掘り方の直径20~40cmで、床面から30~40cm掘り込まれていて。柱穴間の距離は、P1-P2が1.5m、P3-P4が1.6mで南北間がほぼ同じである。

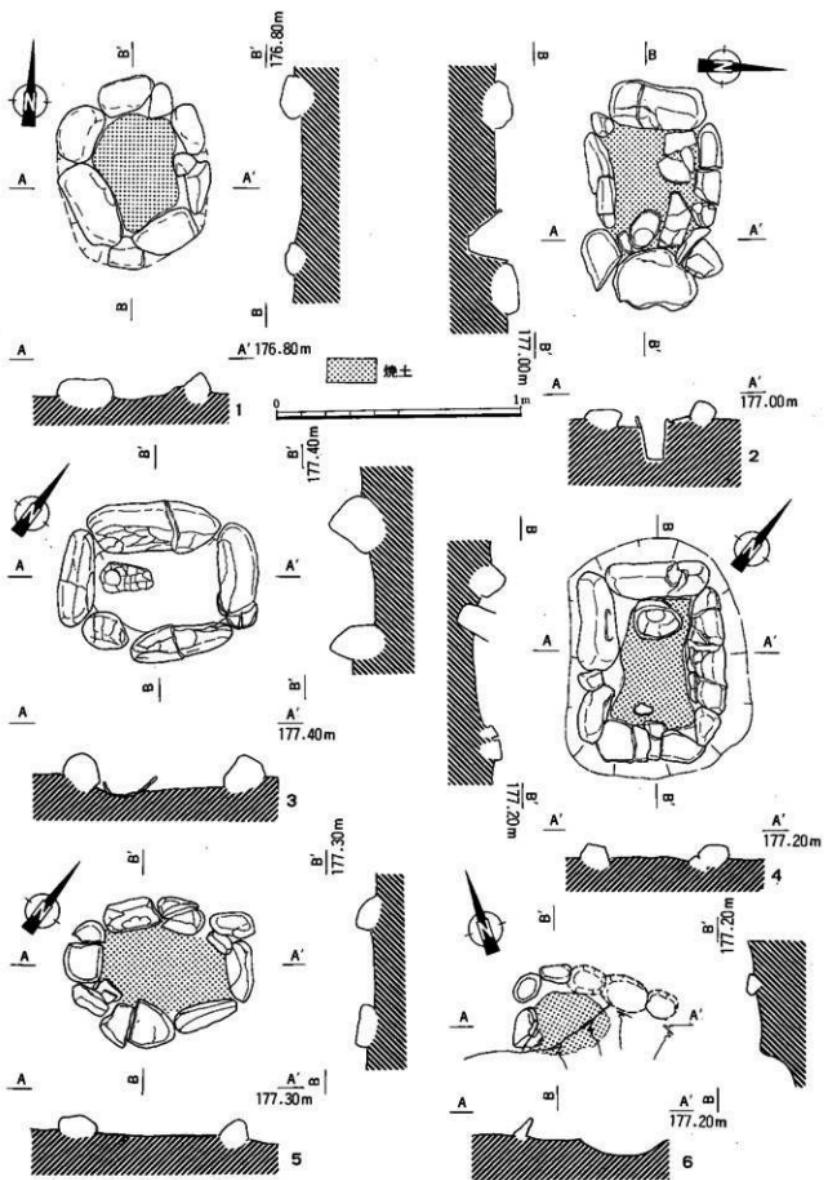
炉は、長方形の石組炉1基が住居跡の中央付近



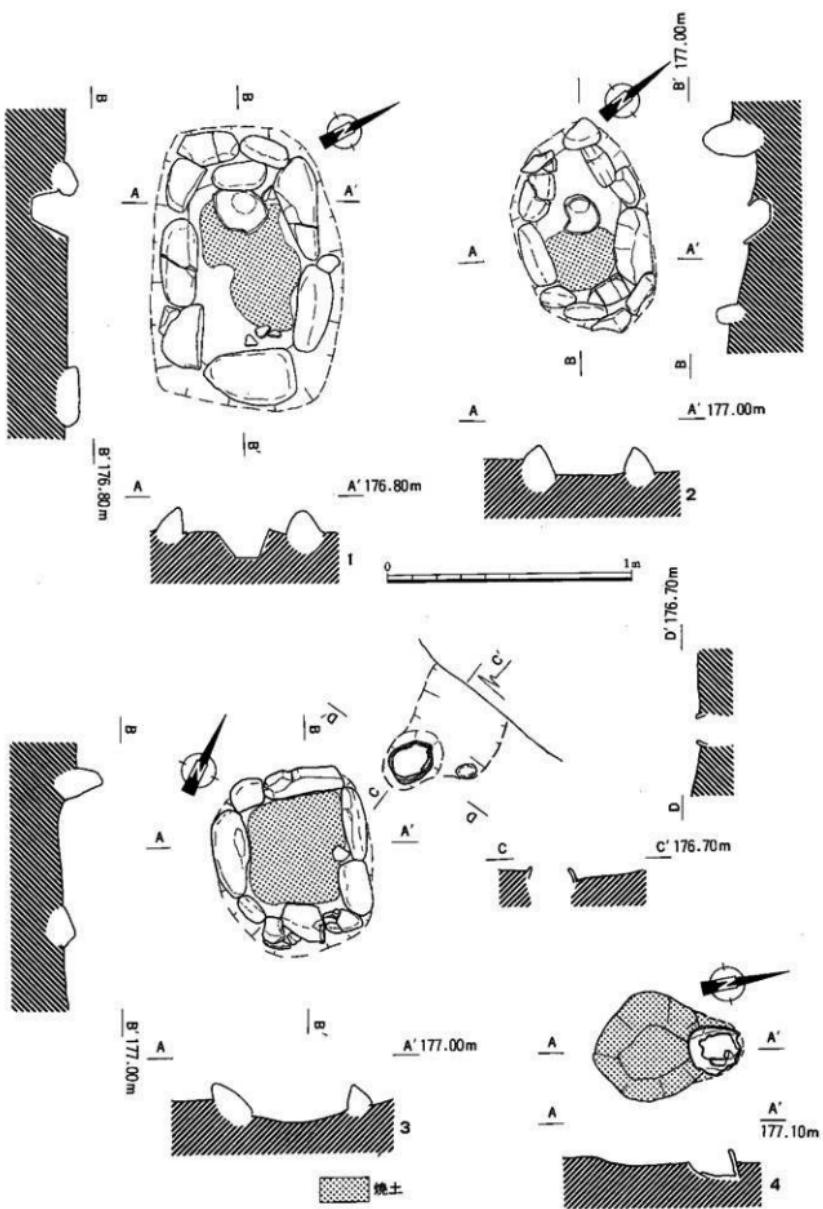
第15図 第15号住居跡実測図 (1/40)



第16図 石組炉窯測図 (1/20) 1. 第1号住居炉跡 2. 第2号住居炉跡 3. 第3号住居炉跡



第17図 石組炉窯測図 (1/20) 1. 第4号住居炉跡 2. 第5号住居炉跡 3. 第6号住居炉跡
4. 第7号住居炉跡 5. 第8号住居炉跡 6. 第9号住居炉跡



第18図 石組炉実測図 (1/20) 1. 第10号住居炉跡 2. 第11号住居炉跡 3. 第12号住居炉跡
4. 第14号住居炉跡

にある。主軸方向はN-37°-Eである。規模は、長辺0.7m・短辺0.6mである。炉石は長さ20-35cmの河原石を使用している。北辺には35cm×20cmの面取りした平たい石を使用している。焼土が炉内全体に広がり、炉石は熱を受け亀裂が入る。炉の北東10cmには埋甕が1基ある。

住居跡内からは土器・石器・小型土器が出土している。石器は、石錘1点・磨製石斧2点・磨石1点が出土している。覆土中には長さ30-60cm・幅20-30cmの河原石が入っていた。

住居跡の時期は出土土器から中期中葉に位置づけられよう。

第13号住居跡（第14図、図版第15）

住居跡は発掘区の南西、X15・Y15-16区に検出された。8号住居跡の西に位置する。削平を受け、壁が2.5mしか残っていない。標高は床面で177.4m、地山から約20cm掘り込まれる。

住居跡内からは土器・石器が出土している。石器は石錘1点・磨製石斧1点が出土している。

住居跡の時期は出土土器から中期中葉に位置づけられよう。

第15号住居跡（第15図、図版第16）

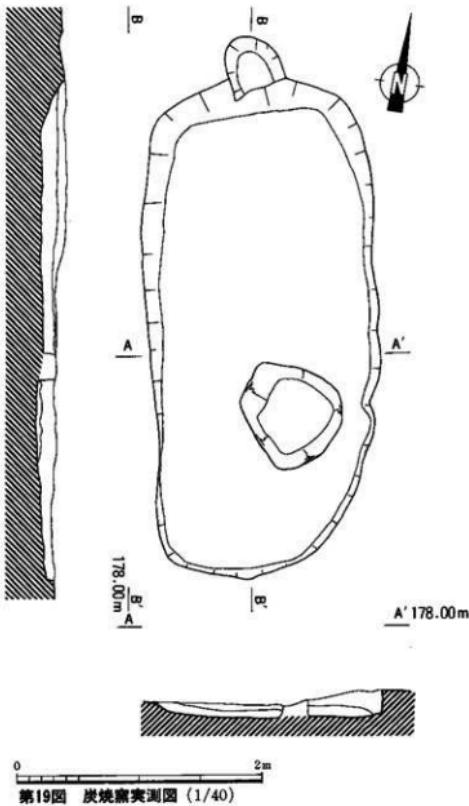
住居跡は発掘区の北に離れて、X47-49・Y20-22区に検出された。平面形は円形で、規模は長軸2.88m・短軸2.34mである。標高は床面で166.2m、地山から約30cm掘り込まれる。炉は地床炉1基が住居跡の中央にある。焼土は径約50cmの円形で、床面より10cm盛んでいる。住居跡内からは縄文土器細片が出土している。

炭焼窯（第19図、図版第16）

炭焼窯は発掘区の西側、X27-29・Y15-17区に検出された。1号住居跡の北に位置する。抜根跡が遺構内にあり遺存状況は良くない。

規模は、長軸3.4m・短軸1.9mで、北辺に長さ50cm・幅40cmの突出した座みがある。この突出部は煙道の痕跡と考えられる。残存部分で地山から10-20cm掘り込まれている。床面は焼土が薄く広がっている。床面上の覆土には木炭粒が厚さ10cmに多く入っていた。炭焼窯の年代を示す遺物は、遺構内からは出土していない。

（岡本）



第19図 炭焼窯実測図 (1/40)

5. 遺物

A 土器

出土した土器には、縄文土器（早期・中期・後期）、土師器、須恵器などがある。遺物の大半を占める縄文土器（中期）は、住居跡、および包含層より出土している。

① 早期（第28図、図版第17-1） 口縁部が比較的、上部に開き、外面には一つ、又は二つの段を持つ。胎土には纖維を含み、内面は条痕が横走する。早期後半に位置すると思われる。発掘区中央側に比較的、纏って出土。

② 中期（図版第17-2～図版第20-1、2） 前葉に含まれる遺物ではなく、中葉の遺物が当遺跡の主体を占める土器群である。文様は隆帯と半隆起線で構成され、隆帯上に刻目や、くし状工具で刺突するもの、半隆起線のみで文様を構成するもの、くし状工具で刺突した隆帯と半隆起線で過溝になるものなどがある（図版第20-2）。これらの土器は、古府式（高木1954）、庄川町松厚遺跡II期B（橋本他1975）、古串田新式（小島1972）に比定される。後葉土器は、古府式（高木1954）、庄川町松厚遺跡II期B（橋本他1975）、古串田新式（小島1972）に比定される。後葉土器では、葉脈状文を持つもの、口縁が外反し沈線で文様構成し、S字状に垂下する沈線を施すものも若干見られる。これらは、串田新式（小島1964）、岩崎野式（柳井1976）に比定される。

③ 後期（図版第20-3） やや台形の波頭部（波状口縁）のもの、平縁で、口縁部に纏文を持つものなどがある。これらは、滑川市本江遺跡（小島1979）に於いて後期後半に位置付けされたJ類に近い。

④ 純手土器（図版第17-3） 第8号住床より出土。上半部を構成する約手は、長軸の端から端にかけられしており、内面には煤が付着し、底面は、ほぼ正円形で舟形状浅鉢。藤森栄一氏分類に（藤森1970）によれば、二窓式が県内では朝日町下山新遺跡、宇奈月町浦山寺藏遺跡、城端町西山A遺跡などに出土。

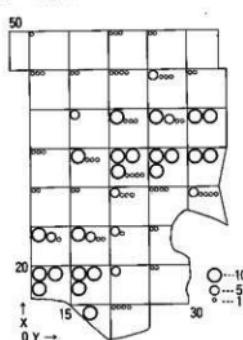
⑤ 土師器・須恵器 土師器の出土状況は纏まりではなく分散して出土。杯の底部には回転糸切り痕がある。須恵器の出土状況は発掘区の西側に数点出土。両土器に伴う遺構はない。

B. 石器（第20～27図・図版第21～19）

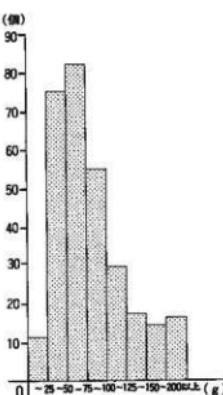
調査により出土した石器には、石錐、磨製石斧、打製石斧、磨（擦）石、敲石、石皿、石鏃、石棒、垂玉、スクレイバー、石槍、磨製石斧未完成などがあり、量的には石錐、磨製石斧、磨（擦）石、凹石が多い。これらの石器は土器群と出土状況と位置を同じくし、層位的にも土器と同様に見られ、住居跡覆土内からの出土も比較的多い。所属時期は、その出土状況や、伴出土器が縄文時代中期中葉に位置付けられることから、一応、大半が当該期に相当すると考えられる（石槍などは除く）。

① 石錐（第20図・21図・図版第21、22-1）

破損したものも含め、合計481点出土している。内訳は住居跡より64点、その他は包含層よりである。出土状況（第20図）をみると、ある程度のまとまりを保ちながら分散して出土しており特にX35Y21区（図版第22-1）からは26点がまとまって出土している。住居跡では第1号住より28点、第3～5号住では13～17点、他は10点以下である。形状は偏平で梢円形を呈する礫を利用している。長軸に対して、垂直方向から数回の打撃を加えて糸掛けを作出したためか剥離面があまり大きくないのが特徴である。長さは大小の長



第20図 石錐分布図



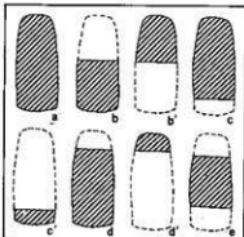
第21図 石錐重量度数分布図

きがあり、大きいもので10cm、小さいもので3.5cmある。5~6cmのものが全体の約4割を占める。重量は最小10gから最大385gまであり、25~75gまでのものが全体の5割強を占め、次いで75~100gが2割弱、200g以上、25g以下は少ない。

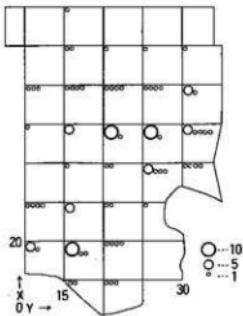
② 磨製石斧（第23図・図版第22-2,3,同23-1）

ここで磨製石斧としたものは未完成品や破損したものも含め合計186点で、石錐について量が多い。内訳は住居跡より出土したものは64点、他は包含層より出土。住居跡よりの出土数は第1、3、4、5、7号住より8~10点、その他の住居跡は5点以下である。石材は蛇紋岩系と硬質砂岩系に大別でき、前者が多く後者は少ない。形態は定角式が多く、長さは大小の長さがあり大きいもので18cm、小さいもので3.3cmある。

遺存状態を次の8種類（第22図）



第22図 磨製石斧遺存状態模式図



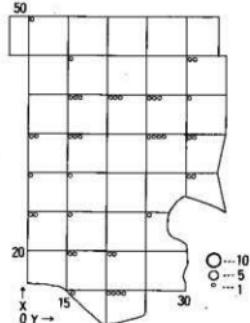
第23図 磨製石斧分布図

に分類してみると次のようになる。⑥ 完成品 包含層では29点、住居跡では33点、⑤ ほぼ中間で折れた下半部、包含層では2点、住居跡では2点、⑦ 同様に上半部 包含層では9点、住居跡では1点、⑧ 刃部（下端）を欠くもの 包含層では29点、住居跡では10点、⑨ 刃部（下端）のみのこすもの 包含層では14点、住居跡では1点、⑩ 頭部（上端）を欠くもの 包含層では10点、住居跡では1点、⑪ 頭部（上端）のみのこすもの 包含層では14点、住居跡では2点、⑫ その他の欠損品および断片 包含層では8点、住居跡では2点 これによると⑥は62点ともっと多いが、全体の4割にも満たない。欠損品の中では⑨が45点と最も多く、⑩を除く他は、ほぼ同じくらいの数量がみられる。

③ 打製石斧（第24図・図版第23-2） 破損したものも含め合計50点出土。内訳は住居跡より4点、他は包含層。出土状況（第24図）は、纏まりはなく分散して出土。第1~3号住に各々1~2点出土。完成品は少なく、石材は砂岩系が多い。形態は、撥形、短櫛、分鋸型に大別できる。これらは、大型で横長の剥片を素材として、主に側縁は剥離・敲打により整形され、刃部などは、ほとんど二次的な加工がされず、背面には自然面が残る。

④ 回石（第26図・図版23-3） 破損したものも含め合計157点出土。内訳は住居跡より17点、他は包含層。出土状況（第26図）は、ある程度の纏まりを保ちながら分散して出土。第1~3、5、8~10号住に各々1~4点出土。石材は大半が砂岩系である。拳大の円碟や楕円碟が用いられ、片面ないし、両面に1~2個の凹を有する例が多く、又、側縁に擦面があり、磨（擦）石として、使用されている例もある。

⑤ 磨（擦）石（第25図・図版第24-1（下）、24-2） 破損したものも含め合計159点出土。内訳は、住居跡より31点、他は包含層。出土状況（第25図）は、ある程度の纏まりを保ちながら分散して出土。第13、15号住を除き他は全て出土。特に第1号住では10点、他は5点以下である。形態は①円形・楕円形の表裏面に平坦磨（擦）面が見られるもの、②側面の形が背の低い、ほぼ二等辺三角形を呈し、その底面に相当する部分に約1~2cm幅の磨（擦）面になるもの。これら①と②の出土量を比較すると①が全体の9割を占める。



第24図 打製石斧分布図

⑥ 石皿（第27図・図版第24-3、同第25-6~10） 破損したものも含め合計19点出土（砥石との判別は難しいが、一応、全て石皿とした）。内訳は、住居跡より5点、他は包含層。出土状況（第27図）は、纏まりではなく分散して出土。第2、7、8号住より各々1~2点出土。

⑦ 磨石（第27図・図版第24-1） 合計12点出土。内訳は、住居跡より3点、他は包含層。出土状況（第27図）は、纏まりではなく分散して出土。第3・4号住より各々1~2点出土。橢円形の礫を用い、先端部が敲打によりつぶれている。

⑧ 石棒（図版第25-11） 破損品で3点、包含層より出土。鍔や隆起などは見られず、小島俊彰氏分類（小島1976）第Ⅴ型式に該当する。

⑨ 石鏃（図版第25-2） 包含層からの出土はなく、第10号住より1点出土。形態は凹基無茎鏃である。

⑩ スクレイパー（図版第25-4、5） 包含層より2点出土。剥片を用いて、先端の幅広のところに細かい剝離をつけ刃部をつくる。

⑪ 垂飾品（図版第25-3） 包含層より1点出土。穿孔部分が欠損、形態は三角錐状を呈し、長さ3.1cm、厚さ1.8cm、幅（底面）2.6cm、穿孔位置は中心部よりやや上側にある。

⑫ 石槍（図版第25-1） 包含層より1点出土。現長5.8cm、幅1.8cmの細みの形をし、部が欠損しているが、長さを想定すると7.2cm前後と思われる。

C、土製品

出土点数は多く、三角墳形土製品、円板状土製品、土製耳飾、小型土器、土偶などがある。出土状況は、住居跡よりの出土もかなり多い。

① 三角墳形土製品（図版第32-1~4） 4点出土。〔当土製品の各部位の名称は、小林康男氏（1980）の記述に従い形態を説明する〕1はX17Y14区出土。長さ8.3cm、幅4.9cm、高さ5.2cm、中央断面は二等辺三角形、孔は側面のやや中央部に位置し、径は8mm。文様は、両正面に「S」字状が施され、底面はない。側面は三角形状区画を基本となり、一方は一重、他方は二重に施す。側面の一部が欠損し、重量は266g。2は第2号住東側の壁近くで出土。長さ7cm、幅4cm、高さ8cm、底面はやや凹んでいる。中央断面は二等辺三角形、孔はなく、正側底面には、文様は施されない。重量は252g。3は第3号住出土。長さ7.5cm、幅4.6cm、高さ3.6cm、中央断面は正三角形、孔は側面のやや上、片方側面の下に位置（貫通？）。径は4mm、正側底面には文様は施されない。4は第3号住P-5から側面が直立した状態で出土。長さ8cm、幅5.9、高さ5.5cm、中央断面は正三角形、孔は側面の中央部に位置し、径は3mm（貫通孔ではない）文様は、両正面に「X」字状が施され、底面にも同様な沈線の一部が見られる。側面は三角形状区画を基本とし、両側面とも一重に施す。重量は339g。この土製は、古くは瓜幡一郎氏（八幡1928）の研究を嚆矢とし、近年では小林康男氏（前記）、小島俊彰氏（小島1981、83）の両氏により、集成・研究がなされている。これらの成果によると北は岩手県、西は石川県までの出土例が知られている。（工藤俊樹氏の御教示によると福井県にも例あり）このうち、最も多く出土する所として、新潟・富山両県に12例の報告がある。県内での出土は北代遺跡4点、直坂遺跡3点複数出土しているが、7遺跡が出土地となる。尚構造からの出土例は、北代遺跡（藤田1981）石川県笠舞遺跡（南他1981）などにあり、この両遺跡では、共に住居跡の壁際出土と報告されている。当遺跡でも2、3、4が住居跡より出土。特に4は住居跡の主柱穴のひとつより出土。類例は増加したが、まだ具体的な用途は想定しにくく、今後の課題としたい。（小林康男氏によれば呪術具の一つという（小林1980））

② 小型土器（図版第32-5~8） 図版で示したのは4点（完形品）、住居跡などの出土例が多い。

③ 土製耳飾 第3号住より1点出土。白型を呈し、中央に孔がないタイプ。無文で表面は調整されている。

④ 円板状土製品 土器片を加工して、円版状にしたもののが数点出土。

⑤ 土偶（第30図、表1、図版30・31）

出土した土偶は、ほぼ完成品（13）の1点を除けば全て部位破片である。内訳は、頭部位片8・腕部位片4・胸部位片7・脚部位片9・腕部～脚部位片3・胸部～脚部位片4・臀部～脚部位片7で、個体数におせば計39点となる。いずれも住居跡の覆土やその周囲の濃密な遺物包含層から、中期中葉から後葉にかけての土器・石器などに混在し出土しており、出土状況から見て他の遺物と共に住居跡の埋没過程の中で、その窪みに廃棄またはかたづけがなされたようで、特に注目すべき出土状況を示す例はなかった。ただ、住居跡覆土中のものでは、第1号住居跡が8点と量的に突出して多く、また整理作業段階で同住居跡出土のものに、いわゆる接合資料（1）が認められた（第30図、表1）。

以下、土偶の概要を記すが、当遺跡の土偶群に見られる文様や施文手法には共通性が認められ、現段階では個々に時期差は読み取れないため、ここでは個々の詳細な説明をさけ、土偶全体を通しての特徴について概観しておく。

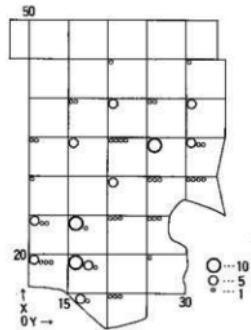
先ず、土偶の形態をおおまかに見れば、有脚で全身を立体的に表現した立像土偶（1・14・16）のI群と、腕・脚部の表現をもたないいわゆるコケシ状の土偶（13）のII群がある。この内、I群は、出土土偶の大半を占めるもので、後方へ反りぎみの脚部に立体的な頭部をのせ、両手を左右に上方向へ伸ばし、独立した2本の脚をもつ形を基本形態とするが、個々の部位を比較すると特に脚部の表現手法の違いにより、さらに細分が可能で概ね3類に分けられる。すなわち、15・16のような長めの円柱状の脚をもつもの（1類）と、1・4・5・10～12のような脚部の下が直ぐに脚の甲に移る扁平な脚部をもつもの（2類）、さらに14のような両者の中间形態ともいえる短い円柱状の脚をもつもの（3類）があり、量的には2類のものが他を圧倒する。

次に、土偶の製作手法としては、13が手づくね製作と考えられるほか、I群系土偶の全てがいわゆる分割塊製作法〔小野1984〕を用いている。観察できる接合面では、擬口縁状の割れがわりあい目立ち、頭部と脚部の接合に木芯接合法をとる例（6・7・16）も見られる。また、土偶に施される文様は、I・II群に共通しており、棒状もしくは管状の工具で直線や曲線を施し、その区画内や縫に沿ってヘラ状工具や管状工具で刺突・列点文などを施文する。施文は、無文のもの（11）は別にして土偶の全身に施すものが多く、胸部前面では正中線を思わせる直線を、脚部背面では「レ」の字状または逆「レ」の字状の曲線（1・5・16）をもつ例が目立つ。また、出土土偶の頭部位片全ての頭頂部には、髪型をおもわせる綾杉状の文様（1・2～9・13）が見られ、当遺跡出土土偶の大きな特徴となっている。なお、その頭部自体の形態については頭頂部がほぼ平滑なもの（2・6・7・9）と、頭頂部がやや丸味をおび人頭に近いもの（1・3・8・13）が認められるものの、目・鼻・口など顔面の表現や成形手法においては両者に類似性が読み取れ、相対的には中期前葉の八尾町長山遺跡出土のI群1類B型土偶〔神保1985〕群の系統に含まれるものと考えられる。

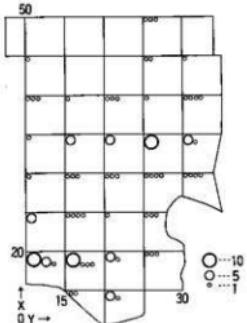
以上が、東黒牧上野遺跡A地区出土土偶の主な特徴である。当遺跡の土偶は、上記の通り中期中葉から後葉にかけての一括資料であり、また、個々の残存部位片を関連することで、もとの形が復元できる個体が多々存在するなど資料としてはわりあいまとまったものとなっている。次にその点を踏まえ若干の考察を加え、まとめとする。

さて、当土偶群の類似資料としては、すでに庄川町松原遺跡〔橋本他1975〕・立山町二ッ塚遺跡〔橋本他1978〕など10遺跡の資料が知られているが、部位破片が多くこのため、県内の中期における土偶の変遷についてはその全容が解明されないままとなっている〔神保1988〕。つまり、長山遺跡のI群系土偶〔神保1985〕にその初現形態を見る中期前葉～中葉の主流をなすいわゆる河童型土偶〔小林1983〕の系統のものが、後葉～末葉になって脚の表現がまったく見られない板状の土偶に取って変わる時期の実態が不明瞭であった。こうした状態の中で、当遺跡の土偶群は新たな手がかりを示す資料と考えられる。すなわち、当遺跡I群2類系の土偶をその過度期の主要形態と理解し、土偶群全体を同時期の一様相を示す資料との見通しをもつ。ただこの点については、現段階での見通しであり、今後、共伴土器との再検討や他の遺跡出土資料との比較を行ないさらに実態を明らかにしていただきたい。

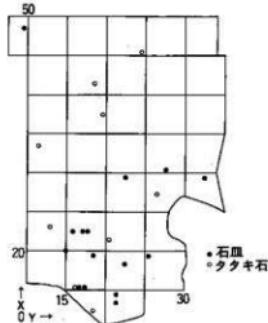
（神保）



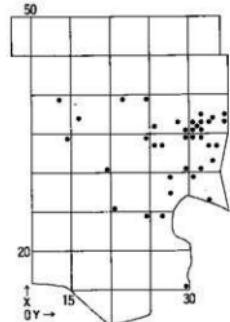
第25図 磨(擦)石分布図



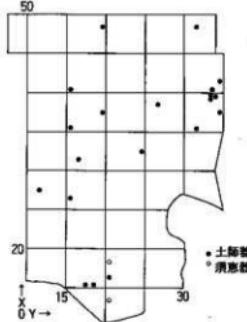
第26図 凹石分布図



第27図 石皿・敲石分布図



第28図 縄文時代早期土器分布図



第29図 土器器・須恵器分布図



第30図 土偶の地区別分布図

| No. | 当 土 区 | 部 位 | 国鉄番号 | 備 考 | No. | 当 土 区 | 部 位 | 国鉄番号 | 備 考 |
|-----|--------------|---------|---------|-----------------------------|-----|--------------|---------|------|----------------------|
| 1 | X 31 Y 16 2層 | 廻部-脚部位片 | 31-16 | 中央・芯跡或有り(頭-脚部接合面)・赤褐色底有り | 22 | X-01セクション区 | 脚部位片 | — | 中央 |
| 2 | X 38 Y 16 2層 | 廻部-脚部位片 | 31-12 | 中央・縦口縁状の割れ口(頭-脚部接合面) | 23 | 在-07E | 左脚部位片 | — | 中央 |
| 3 | X 36 Y 22 2層 | 脚部位片 | 31-15 a | 中央・# (脚-脚部接合面) | 24 | 在-08E | 右脚部位片 | — | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面) |
| 4 | X 33 Y 17 | 脚部-脚部位片 | 31-14 | 中央・二次火熱により變色 | 25 | 在-10E-Na5 | 骨盤-脚部位片 | — | 中央・赤褐色底有り |
| 5 | X 17 Y 20 1層 | # | 31-10 | 中央・縦口縫狀の割れ口(脚-脚部接合面) | 26 | X-15Y 5 1層 | 脚部位片 | — | 中央 |
| 6 | X 37 Y 34 1層 | # | — | 中央・# (#) | 27 | X 16 Y 16 1層 | 左脚部位片 | — | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面) |
| 7 | X 15 Y 15 1層 | # | 31-11 | 中央・# (#) | 28 | X 18 Y 17 1層 | 脚部位片 | — | 中央 |
| 8 | X 24 Y 17 1層 | # | — | 中央・# (#) | 29 | X 19 Y 18 1層 | 脚部-脚部位片 | — | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面) |
| 9 | B-07 青褐色土 | 脚部位片 | 21-9 | 中央 | 30 | X 22 Y 13 1層 | 左脚部位片 | — | 中央 |
| 10 | 住-05E | # | 30-6 | 中央・芯跡或有り(頭-脚部接合面)・黄褐色有り | 31 | X 21 Y 12 | 脚部位片 | — | 中央 |
| 11 | 住-04E | # | 31-8 | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面) | 32 | X 20 Y 17 1層 | # | — | 中央・二次火熱により變色 |
| 12 | 住-01D | # | — | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面)・赤褐色有り | 33 | X 30 Y 16 | 脚部位片 | — | 中央 |
| 13 | 住-01 | 廻部-脚部位片 | 30-1 | %12:脚部-脚部位片-脚部-脚部位片-脚部-脚部位片 | 34 | X 30 Y 26 | 左脚部位片 | — | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面) |
| 14 | 住-02C | はげ先形 | 31-13 | 中央 | 35 | X 33 Y 30 1層 | 骨盤-脚部位片 | — | 中央 |
| 15 | 住-01B | 廻部位片 | 30-3 | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面) | 36 | X 34 Y 18 1層 | 脚部位片 | — | 中央 |
| 16 | 住-01C | 廻部-脚部位片 | 30-5 | 中央・赤褐色底有り | 37 | X 34 Y 19 1層 | # | — | 中央 |
| 17 | 住-01 | 脚部位片 | 30-2 | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面) | 38 | X 35 Y 24 1層 | 脚部位片 | — | 中央 |
| 18 | 住-10-Cト東 | # | 30-7 | 中央・芯跡或有り(頭-脚部接合面) | 39 | X 37 Y 25 1層 | # | — | 中央 |
| 19 | 住-01C黒褐色土 | 脚部-脚部位片 | 30-4 | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面) | 40 | 在土区不明 | 右脚部位片 | — | 中央・縦口縫狀の割れ口(頭-脚部接合面) |
| 20 | 住-01C黒褐色土 | 右脚部位片 | — | 中央・二次火熱により變色 | 41 | # | 脚部-脚部位片 | — | 中央・# (頭-脚部接合面) |
| 21 | 住-01セクション区 | 脚部位片 | — | 中央 | | | | | *地名略称(東山304)に基づく |

IV まとめ

今回、実施した発掘調査に於いての出土遺物は整理箱で約30箱になる。遺物の整理等はまだ中途の状態で、十分な記述はおこなっていない。内容の不備な点に関しては、記述が遺構を中心ということで、理解していただきたい。

以下、今回の成果を要約してまとめとしたい。

1. 第1号住居跡（大型住居跡）は、県内では朝日町不動堂遺跡（中期前葉）、庄川町松原遺跡（中期中葉）、立山町白岩戸の上遺跡（中期前葉）に次いで大きい、又、住居内のテラス状に石が配置される例は、大沢野町直坂I遺跡第4号住居跡にも例がある。
2. 発掘した住居跡は15棟であるが、未掘も含めると29棟になり、住居跡の重なりが少く、豊穴の掘り込みも深い。
3. 土偶の出土量では朝日町境A遺跡（中期～晚期）、八尾町長山遺跡（中期前葉）に次いで量が多く、中期中葉としては、新資料も出土。
4. 三角塔形土製品が第2号住より1点、第3号住より2点、包含層より1点、計4点出土。
5. 繩文時代中期中葉の資料が比較的まとまって出土している。
6. 繩文時代早期後半の資料が出土。
7. 平安時代の土師器（糸切痕）、須恵器及び管状土錐が出土。
8. 石器は、石錐、磨製石斧、磨（擦）石が多く出土。石錐は1点のみ第10号住より出土。
9. 大学のグランド予定地であったが、計画変更を行い、遺跡を保存した。

引用・参考文献

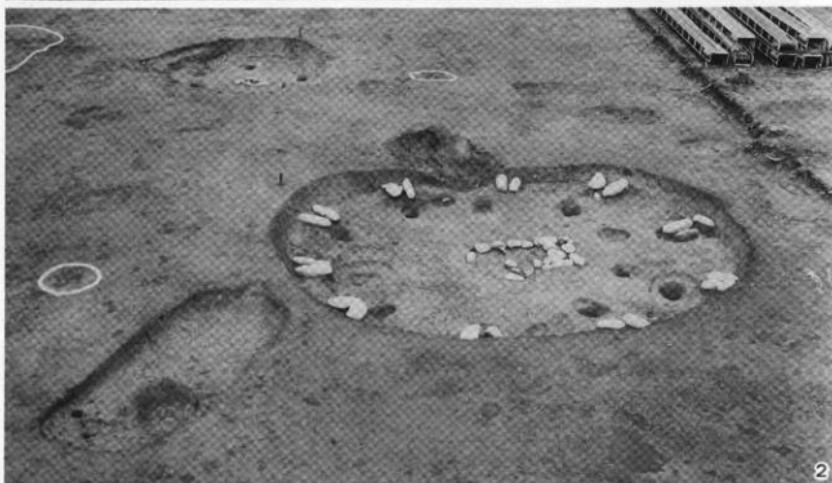
- ウ 上野 審・山本正敏・岡上進一・松本幸治 1977 「城端町西原A遺跡」『富山県福光町・坡塘町立野ヶ原遺跡群第五次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- オ 大山町 1964 「大山町史」
- 小川 龍 1985 「縄文時代の大形住居」について（その1）—その定義と機能をめぐる若干の考察ー」「東京大学文学部考古学研究室研究紀要」第4号 東京大学文学部考古学研究室
- 小川 龍 1989 「縄文時代の大形住居」について（その2）—その定義と機能に関する統論ー」「東京大学文学部考古学研究室研究紀要」第7号 東京大学文学部考古学研究室
- 奥山和久 1984 「山中盆地帯における縄文中期上偶の基礎的研究」『中部高地の考古学』III 長野県考古学会
- 小川正史 1984 「土偶の分類と製作方法」『奈良県立考古学研究』(1) 東京都立神谷原遺跡の土偶ー「甲斐丘陵考古学研究会会報 丘陵」第11号 周丘陵考古学研究会
- カ 片野 謙・島田修一 1988 「富山県大山町の花立遺跡緊急発掘調査概要」 大山町教育委員会
- ク 久々志嶽 1988 「地中に埋もれた大山の歴史」、「大山の歴史だより」1号 大山町史編纂委員会
- 久々志嶽 1988 「大山市郷土都市建設に係る埋蔵文化財試掘調査報告書 黒牧山東野遺跡 東瓶沢遺跡」 大山町教育委員会
- コ 小島俊彦 1972 「縄文中期」、「富山県史考古編」 所収
- 小島俊彦 1974a 「富山県朝日町不動堂遺跡第1次発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 小島俊彦 1975b 「北陸の縄文時代中期の磐屋一戸戸の研究史と現状ー」『大境』第5号 富山考古学会
- 小島俊彦 1976 「加能越飛行における縄文中期の石錐」『金沢美術工芸大学報』第20号
- 小島俊彦 1981 「北陸の三角塔形土製品」『大境』第7号 富山考古学会
- 小林麻男 1988 「三角塔形土製品考」『長野県考古学』37 長野県考古学会
- 小林麻男 1983 「縄文中期土偶の一豪査—いわむの河童型土偶についてー」『長野県考古学年報』46 長野県考古学会
- サ 水井重洋・横木正春 1977 「富山県宇奈月町浦山寺遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- シ 神保孝造・水井重洋・村吉信貴 1981 「富山県立山町造蔵文化財緊急発掘調査概要 白岩戸之上遺跡 吉峰遺跡」立山町教育委員会
- 神保孝造 1985 「III 調査の概要 3 繩文時代 (3) 出土遺物 C 土製品 (a) 土偶」、「IV まとめ 3 繩文時代中期前葉の土偶について」『杏山県八尾町長山遺跡緊急発掘調査報告』八尾町教育委員会
- 神保孝造 1988 「富山の土偶」『昭和63年度度別偶一戸偶一縄文人のこう』富山県埋蔵文化財センター
- ス 舟谷道造 1987 「縄文時代特殊住居跡紹介刊」『大形住居』第23号 東京大学文学部考古学研究室
- ハ 横木 正 1973 「富山県大山町直坂遺跡試掘調査概要」 富山県教育委員会
- 横木 正・神保孝造 1974 「富山県小矢町水上谷遺跡緊急発掘調査」 富山県教育委員会
- 横木 正・柳井 雄・鶴野 正男・神保孝造 1975 「富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概要」庄川町教育委員会
- 横木 正・鶴井 雄・鶴野 正男・柳井重洋 1978 「富山県立山町二ツ塚遺跡緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- 横木 正・柳井 雄・鶴野 正男・柳井重洋・松島吉信・岡本淳一郎 1987 「北陸自動車道遠峰跡一明日町柵3号遺跡」富山県教育委員会
- 横木正春・山本正敏・鶴野 謙・柳井重洋 1988 「馬場山D遺跡 馬場山G遺跡 馬場山H遺跡」富山県教育委員会
- 横木正春編 1989 「北陸自動車道遠峰跡調査報告—明日町柵4号A遺跡調査報告」富山県教育委員会
- 平川莊作 1938 「越中史前文化」
- 南 久和・上田亮子 1981 「金沢市笠幡遺跡」 金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会
- ミモワ 森 秀雄 1951 「大曾の富山県」
- 波渡 誠 1980 「雪国の大曾の縄文家屋」『小田原考古学研究会会報』第9号 小田原考古学研究会



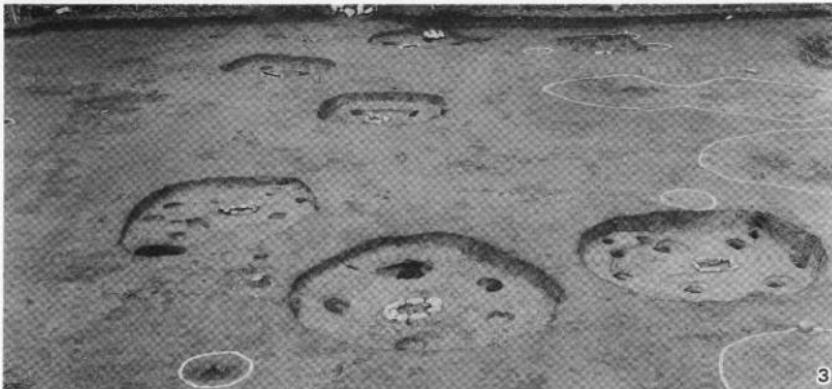
図版第1 1. 東黒牧上野台地(北より) 2. 全景(南より) 3. 全景(南東より)



1

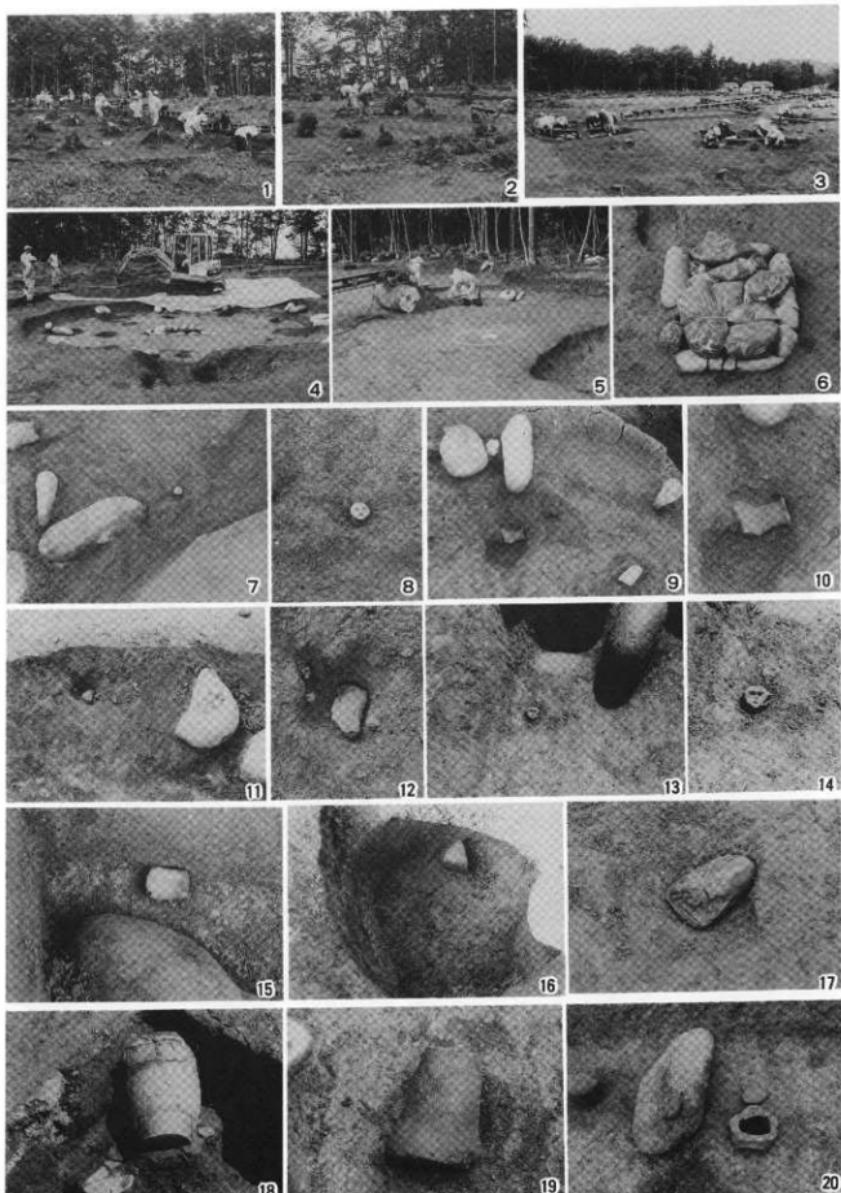


2

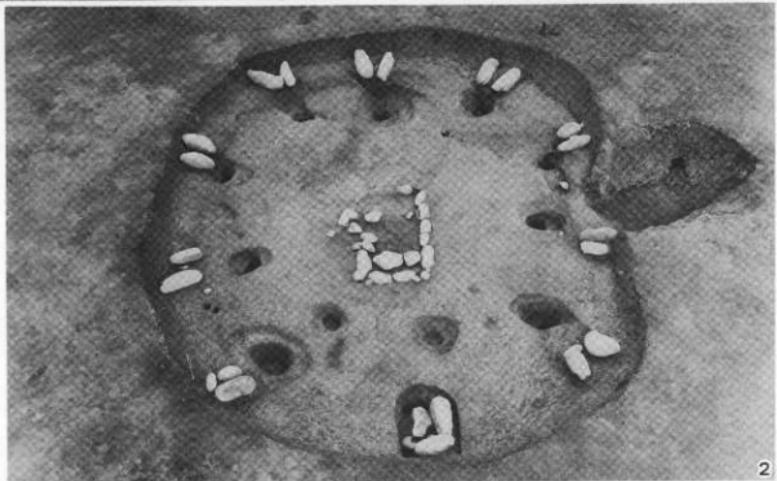


3

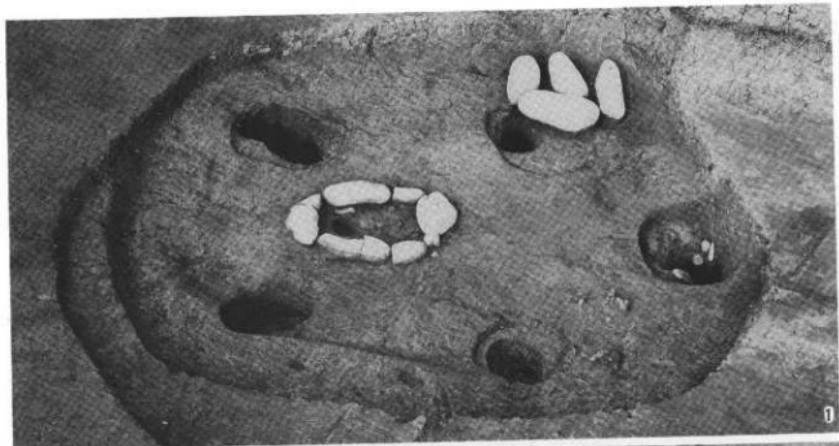
図版第2 1. 全景(西より) 2. 全景(北より) 3. 全景(西より) (11号住、10号住、7号住)



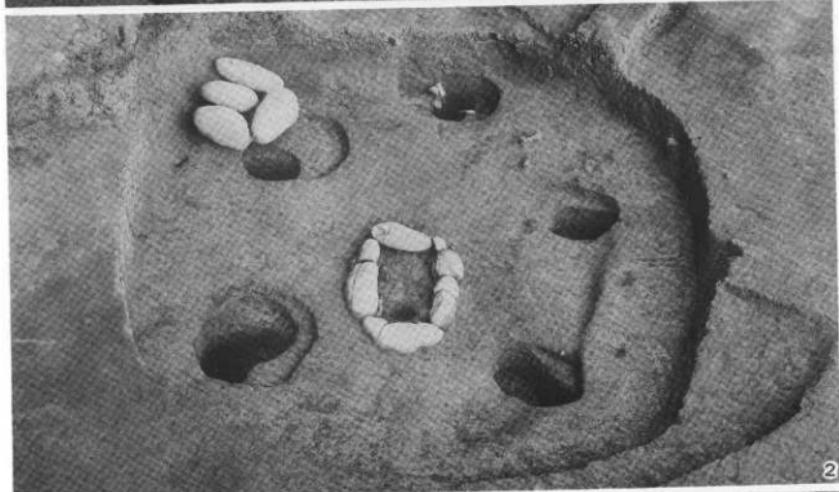
図版第3 1～3 発掘風景 4～6 埋めもどし 7～20 遺物出土状況 7～12 第1号住 13・14 第5号住 15 第2号住
16・18・19 第3号住 17. X17-Y14 20. 第8号住



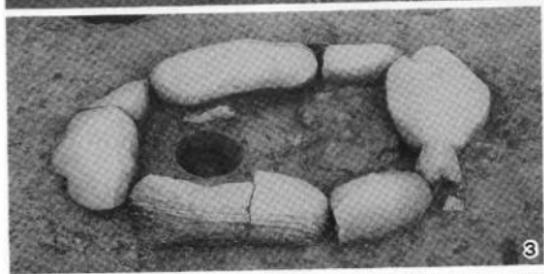
図版第4 第1号住居跡 1. 全景(北より) 2. 全景(西より) 3. 炉(北より) 4. 炉(西より)



1



2

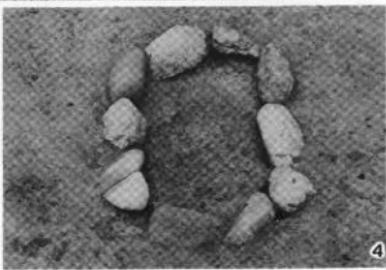
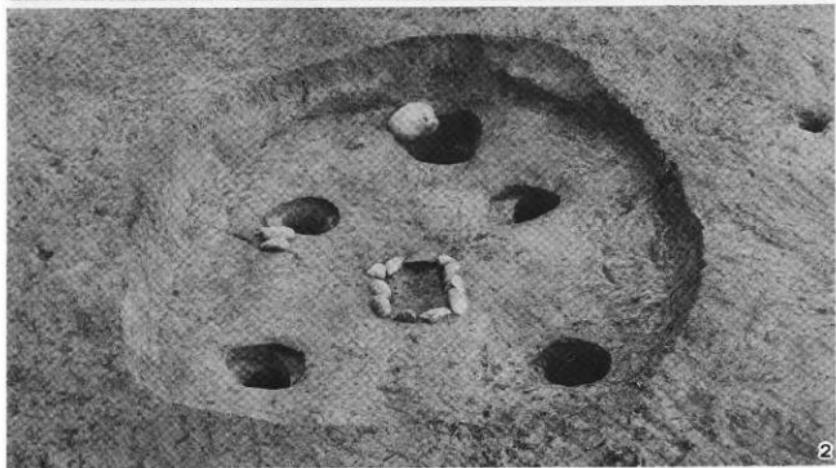
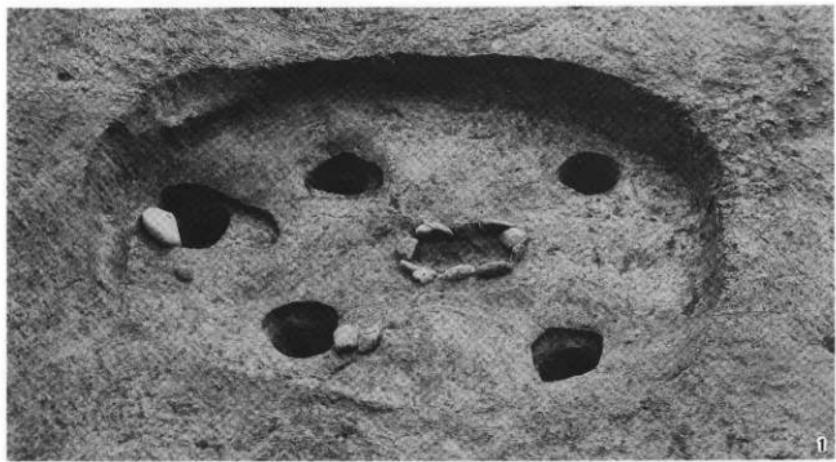


3

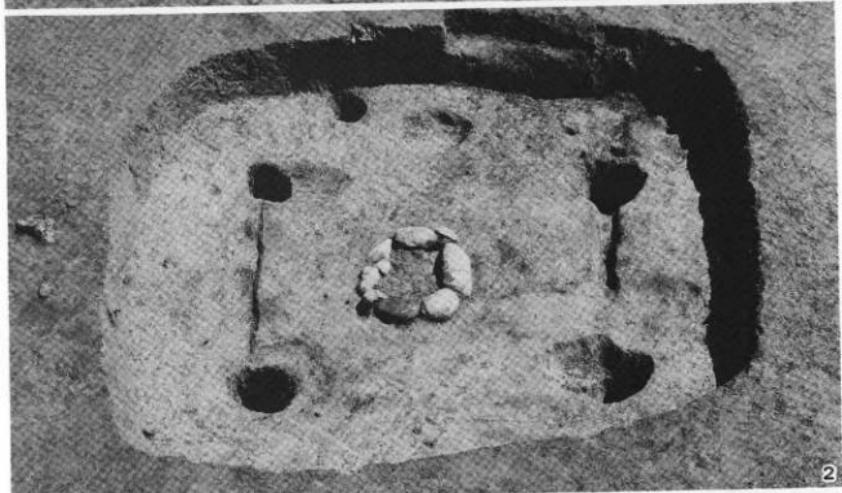
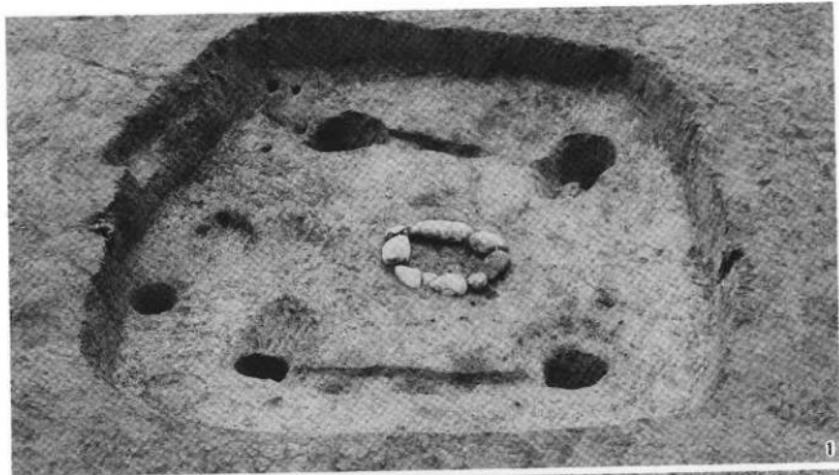


4

図版第5 第2号住居跡 1. 全景(西より) 2. 全景(北より) 3. 炉(西より) 4. 炉(南より)



図版第6 第3号住居跡 1. 全景(東より) 2. 全景(北より) 3. 炉(西より) 4. 炉(南より)

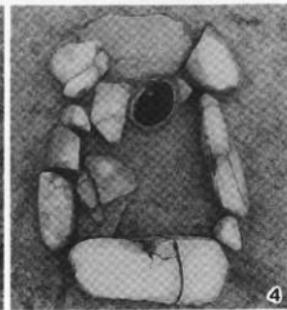
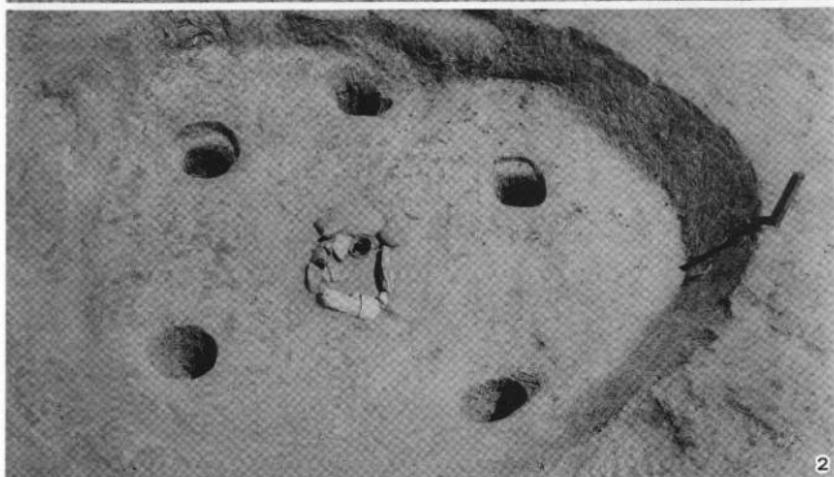
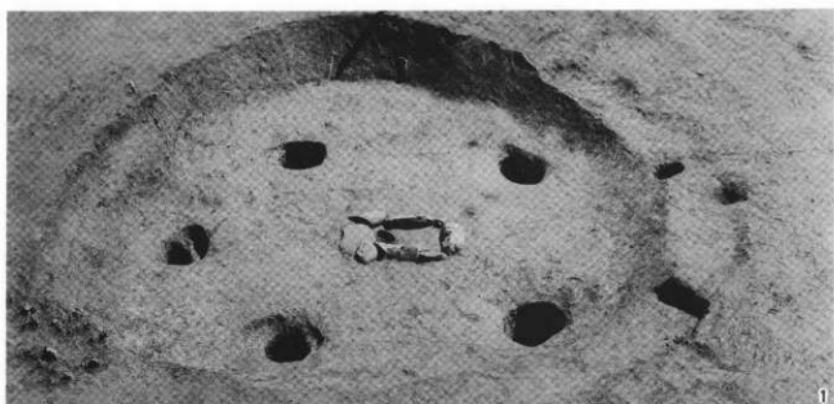


3

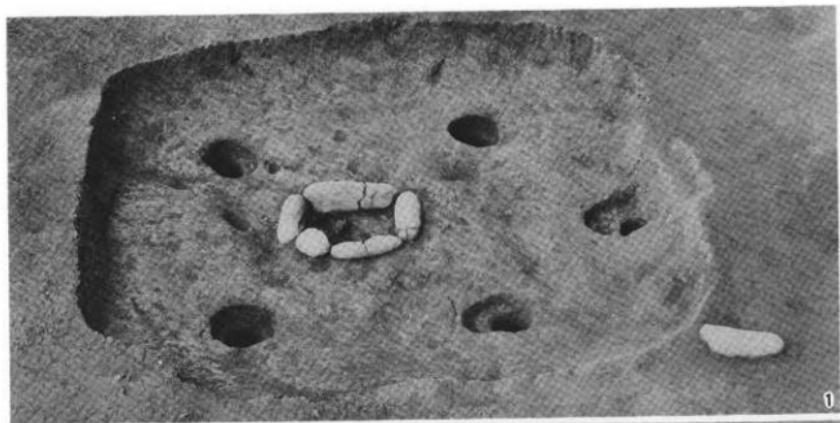


4

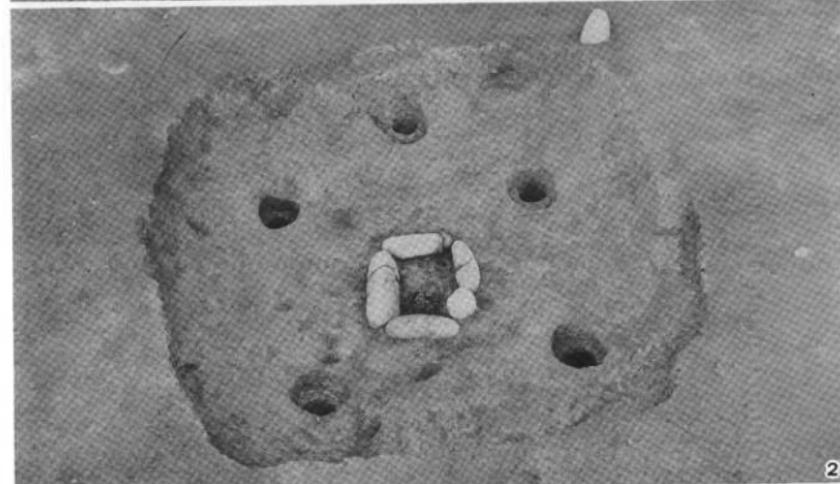
図版第7 第4号住居跡 1. 全景(東より) 2. 全景(北より) 3. 炉(東より) 4. 炉(南より)



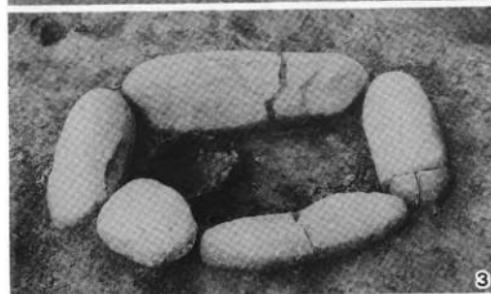
図版第8 第5号住居跡 1. 全景(北より) 2. 全景(西より) 3. 炉(北より) 4. 炉(西より)



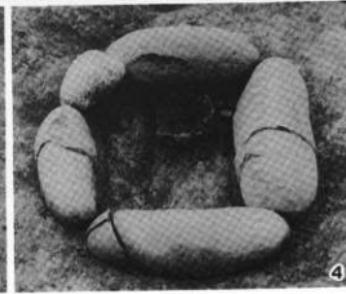
1



2

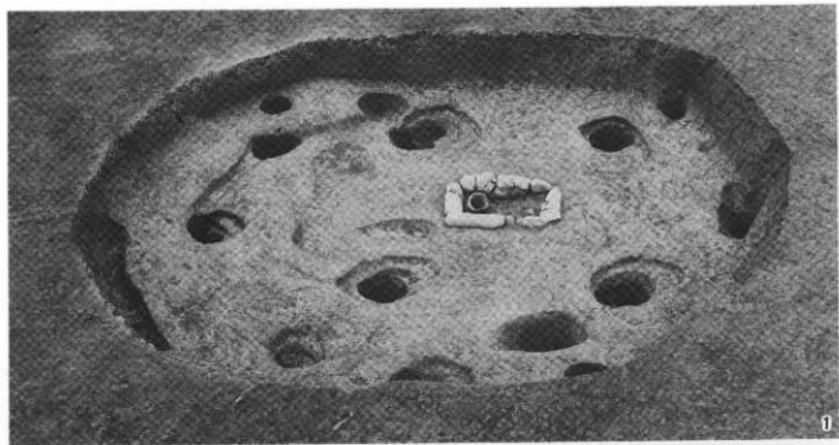


3

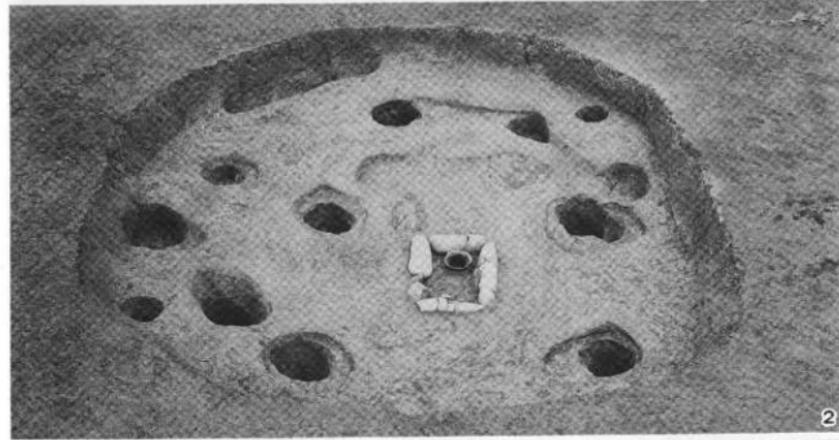


4

図版第9 第6号住居跡 1. 全景(南より) 2. 全景(西より) 3. 炉(南より) 4. 炉(東より)



1



2

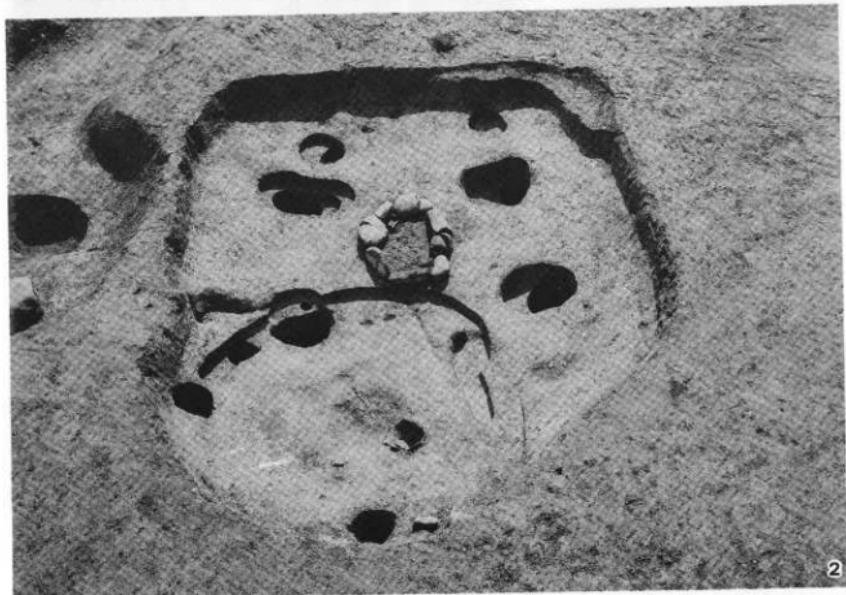
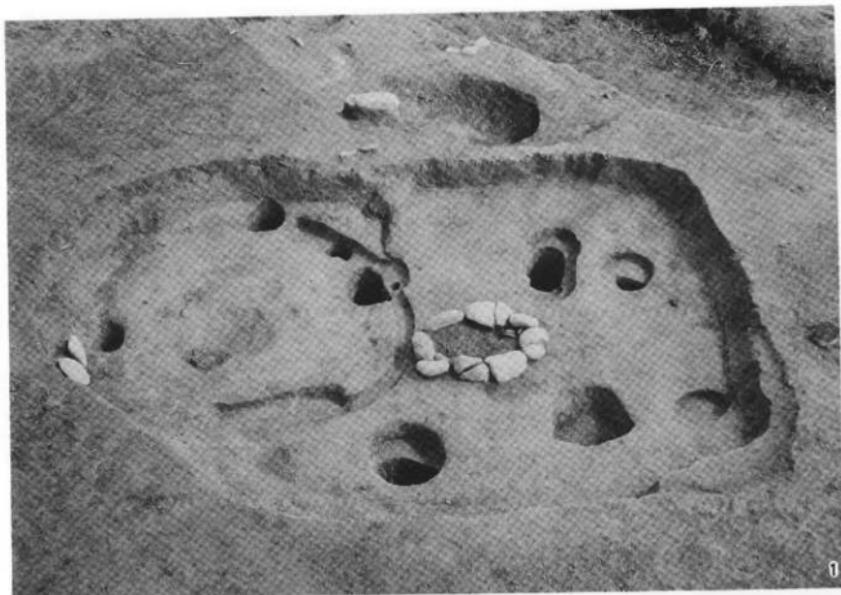


3

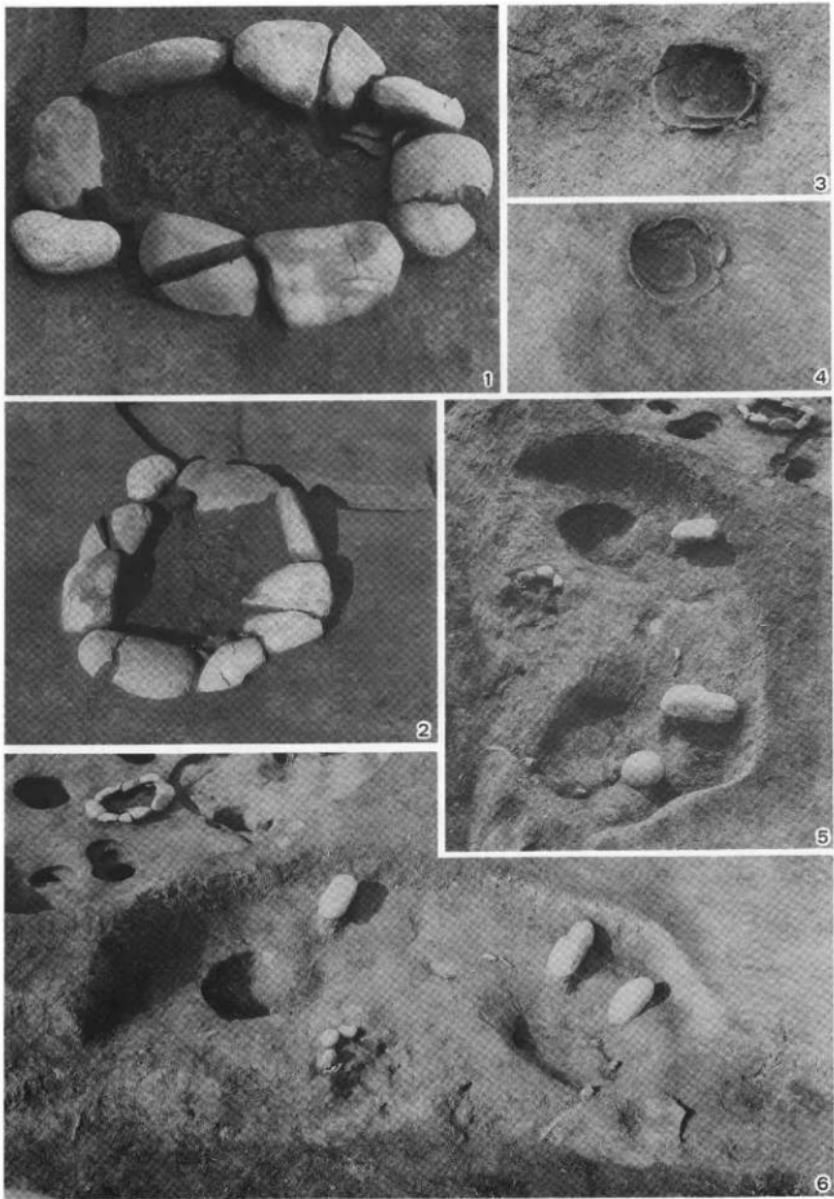


4

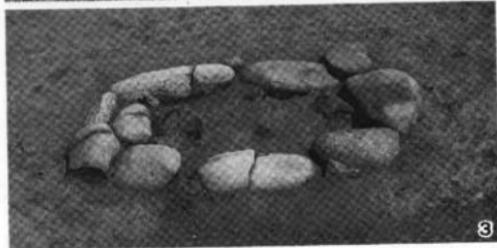
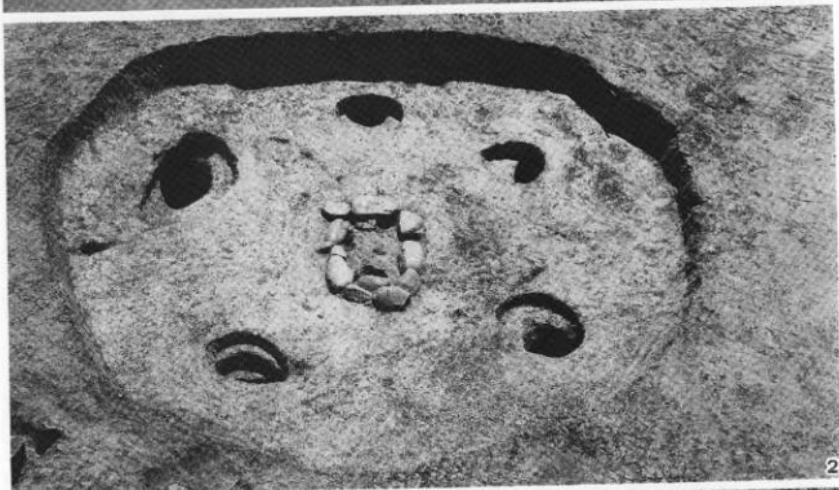
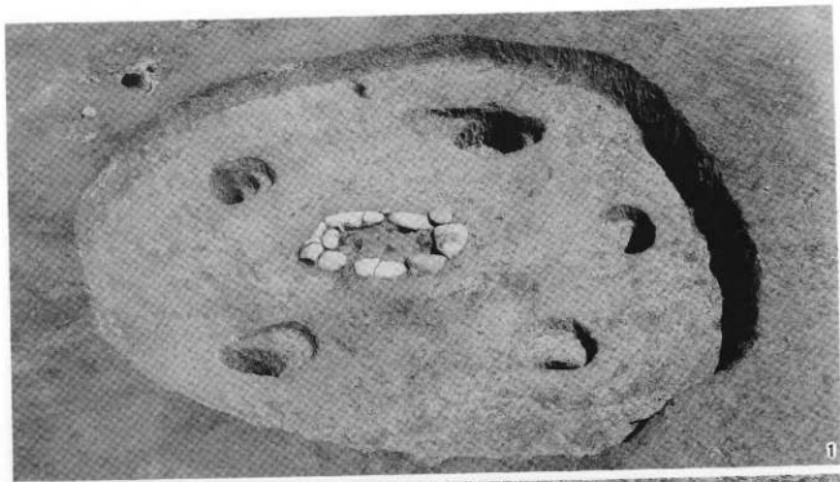
図版第10 第7号住居跡 1. 全景(西より) 2. 全景(南より) 3. 炉(東より) 4. 炉(南より)



図版第11 第8号沟・14号住居跡(左) 1. 全景(北より) 2. 全景(東より)



図版第12 第8号・14号・第9号住居跡 1. 炉(第8号住北より) 2. 炉(第8号住西より)
 3. 第14号住(東より) 4. 第14号住(西より)
 5. 第9号住(東より) 6. 第9号住(南より)



③



④

図版第13 第10号住居跡 1. 全景(西より) 2. 全景(北より) 3. 炉(西より) 4. 炉(北より)